

クラウゼヴィッツと戦略概念の形成

山崎 カヲル

はじめに——佐久間象山と「ストラテジー」

1859（安政6）年といえば、日本では江戸幕府が、一方でアジアに進出してきた列強の圧力に屈しておらずと開国政策を進めるとともに、幕府に敵対したとして橋本左内や吉田松陰たちを処刑し、政局は騒然としていた時期である。この年11月3日（旧暦）、幕末の蘭学者・兵学者として異彩を放っていた佐久間象山は、門弟であると同時に義兄でもあった勝麟太郎（海舟）へと書簡を送り、彼から贈呈されたオランダ語のある兵学書の読後感を、つぎのように記していた¹⁾。

「カラウセキツの遺書蒙御恵贈、誠に望外之義感銘之劇奉存候。かねても申上置候通、洋兵の書も追々相集め候へども、ストラテジーに涉り候書之無、之事を缺き罷在候所、此書にて其大略を相弁じ、千萬難有奉存候。選者十二年の功を用ひ、尚世に出さず候程のもの故か、いかにも簡明のもの、様被存候。潜心熟読益を得候様仕度相企罷在候。先達てより右御礼申上度存じ罷申上度存じ罷在候處、便都合あしく、乍存延引仕候、將此品乍粗末奉呈候。敢て御恵贈之御報と申には無御座、たゞ永以爲好也と被思食可被下候。追々寒気も加り候、千萬爲時御保重奉●〔示偏に壽〕候。以上」（佐久間 1935：152-3）

象山が日本ではじめて『戦争論』を読んだことは、すでに前原透（前原 1994：95）や大木毅（Oki 2014：203）の指摘するところである。ただし、前原も大木も、象山のクラウゼヴィッツ理解が「ストラテジー」と深く関係していることには着目していない。

象山が手にしたのが、E・T・ブロウエルがオランダ語に移した『戦争について』（Over den Oorlog）であることも、オランダへのクラウゼヴィッツ移植の歴史を扱った、パウル・ドンケルの研究のおかげではっきりしている（Donker 2014：211-2, 233-4）。1846年に刊行されたこのオランダ語訳は、クラウゼヴィッツの『遺稿集』第1巻から第3巻に収録された『戦争論』を、2巻本にまとめて訳出したものであった。

象山が「ストラテジー」について、「潜心熟読益を得」たと述べていたことの具体的な内容は、上記の書簡からはごくわずかにしか読み取ることができない。周知のように彼は5年後の1864（元治1）年に53歳で暗殺されてしまっている。『象山全集』を繙いてみても、クラウゼヴィッツに関係した箇所は、先に引いた書簡以外には見当たらない。それゆえに、書

簡そのものをもう少し詳しく見てみよう。

彼はまずは、日本で紹介されている西洋兵学では「ストラテジーに涉り候書之無、之事を缺き罷在候」という事態であったことを嘆く。そして、海舟から送られた『戦争論』を読むことで、「此書にて其大略を相弁じ、千萬難有奉存候」という。つまり、象山はかねてから「ストラテジー」なるものを理解しようと努めてきたが、それを説明してくれる適切な書物に出会わなかった。しかし、『戦争論』での説明で納得できたというのである。

幕末にかなりの量の西洋兵学書が、主にオランダ語経由で輸入・翻訳されたことはよく知られている。兵器や海軍関係を除くと、特に戦術に関する翻訳書が顕著であって、その概要は佐藤堅司の『日本武学史』に収録された論文「三兵戦術の沿革・伝来と日本化」に詳しい（佐藤 1942：741-803）。象山は『戦争論』を知るまえにすでに、プロイセンにおいてドイツ語で刊行され、オランダ語に移されていた、ハインリヒ・フォン・ブランドやカール・フォン・デッカーの3兵戦術書を読んでいた（Ibid：458-9）。私はブランドやデッカーのオランダ語訳を持っていないし、それらの邦訳を手にする機会にも恵まれていない。しかし、もともとブランドもデッカーも著書をドイツ語で発表しているので、ドイツ語原著を利用する。

両者のうちで、戦術と戦略との関係についてそれなりの考察をしているのは、デッカーのほうであった。ブランドは「固有の意味での戦争指導」を、戦術、要塞の攻防、それに「軍指導の教説（高等戦術とか戦略といった名前前で呼ばれるもの）」という3つに分類するだけで、この最後の部分についてはなにも触れていない（Brandt 1833：7）。したがって、ブランドはここでは無視する。

デッカーはというと、彼はビューロウその他の論者の戦略と戦術の区別を列挙したあと、自分の考えを述べている。ブランドよりも詳しい記述がある。だがそれでも、戦略とは「将帥の掌中にある集団としての、軍隊の運用（Handhabung der Armee）」であり、それとは別に、「将帥だけにはもはや帰属せず、より多くの人々の掌中に委ねられているもの」があって、戦術はその一部として「敵と接触している軍の、将帥の一切の要求を満たすような術」だとしか語っていないのである（Decker 1833 1：17）。要するに、将帥（Feldherr）のみに帰せられるものが戦略であり、彼に下属する下級指揮官の担当になるのが戦術ということになる。これは誠に曖昧で凡庸な定義であって、そういわれても私たちは当惑するよりない。

象山はおそらく、このような規定におよそ満足できないでいたのであろう。彼は己を頼むことの多い思想家であって、せっかく「ストラテジー」の存在に着目したにもかかわらず、その内容を明示できないことに、おそらくは非常に焦燥感を抱いていたと思われる。そうしたときに、「カラウセキツ」による「簡明のもの」と出会ったのである。

彼の時代、西洋兵学に関心を抱いていた人々なら、「タクチイキ」「答古知幾」「達古知幾」

などと訳された戦術（オランダ語の taktiek）という用兵領域があることは、だれもが知っていた。しかし、その「タクチイキ」とは別個に「ストラテジー」なるものがあることに気づき、その解明の鍵は「カラウセキツ」に求めうると喝破したのは、象山を嚆矢とする。戦略を戦術とは異なった概念として把握しようとする試みは、ヨーロッパでは18世紀後半に開始され、かなりジグザグな道を辿ったあと、クラウゼヴィッツにおいて古典的な定義として一応の結実を見る。象山はそれに触れることで、戦略の「大略」を把握できたと述べているのである。

その「カラウセキツ」による議論の細部にはのちに言及するとして、私たちはまず、『戦争論』にいたるまでの戦略をめぐる思想的な系譜に、探求の探り針を入れてみたい。

というのも本稿の目的は、クラウゼヴィッツ以前の戦略理解を概観したうえで、彼の理論把握がいかに画期的なものであったのかを確定することにあるからである。彼の時代、概念としての戦略はいまだに生成途上にあつて、混沌とした議論が展開されていたのだが、そこで提示されていたさまざまな模索と対比することで、はじめてクラウゼヴィッツの寄与を持つ画期性が浮かび上がるのである。

なお、付言しておきたいのは、本稿の作成は、日本では2020年2月から本格化する、いわゆる新型コロナ・ウィルス（COVID-19）の深刻な影響のために、市民生活は当然として、研究生活にも多大な困難が生じているなかでの作業となったことである。わが国ではただでさえこの分野での文献蓄積や研究が乏しいのに、それらの参照さえ大きく制限されてしまっているのが現状である。したがって、本稿は主として私が個人的に集めえた諸資料や、これまで取ってきた読書メモに頼った仕事とならざるをえなかったことを、あらかじめ断っておく。しかし、このような困難に直面しようとも、例えわずかであっても、仕事は進めなければならない。

クラウゼヴィッツ戦略論のスケルトン

それでは、佐久間象山という鬼才を感嘆させた、「カラウセキツ」の戦略把握とはどのようなものであったのだろうか。細部のニュアンスに富んで刺激的な部分を、無理矢理にこそげ落として、加えて、政治と戦争という大問題を省略して²⁾、その基本骨格だけを取り出すなら、それはつぎのように要約できる。

戦争は単なるむやみやたらで突発的な暴力行為でないかぎり、なんらかのかたちで組織的に計画され運用されなければならない。戦争はつまり、敵対する陣営おのおのが、相手とみずからとの諸条件を比較計測し、それを土台にしたうえで、自軍の勝利の可能性を追求するものである。したがって、戦争の根底には、伶俐で合理的な計算が、つねに働いている。とはいえ、戦争は単に計算だけに還元できるものではなく、国民の激情のような、集団的に発

露される精神的諸力もそこに無視できない要素として加わっている。このため、合理的計算にすべてを還元することはできない。クラウゼヴィッツの時代には、啓蒙的合理主義を土台にして、戦争の普遍で不変な諸原理を追求する兵学が支配的だったが、クラウゼヴィッツが繰り返し強調しているように、それは戦争における非定量的なもの、つまり、精神的なものを排除して、一切を量的関係のなかで把握することで、かろうじて成立していたにすぎない。

戦争をどのように遂行するかは、戦争指導 (Kriegsführung) の問題である。戦争指導では、広義のそれと狭義の、あるいは、固有のそれとが区別される。前者は、戦争の基本となる戦闘力を準備する一切の活動 (徴募・武装・装備・教練) を含み、後者は、すでに準備活動を通じて造成された戦闘力を前提として、それを駆使して、戦場における戦闘力の行使に関わる部分である。この「本来的な戦争指導」(die eigentliche Kriegführung) はまた、「狭義の戦争術、戦争指導の理論、戦闘力使用の理論」とも言い換えられている (VK: 272, 277/II-1)。『戦争論』が対象にしているのは、この「狭義の戦争術」にほかならない。そこには具体的な戦闘そのものが中心になるが、戦闘と直接に連続して接している諸活動 (行軍・宿営・補給など) も含まれている。これらを確認したうえで、ようやく戦略と戦術という概念カップルが登場する。それは「狭義の戦争術」の内的区分である。

彼がこのふたつを区別するのは、「あらゆる理論の基礎課題」が「同等でないものの分離」(die Trennung des Ungleichtartigen) にあるからにほかならない。つまり、「狭義の戦争術」のなかには、さらに分離を要求する異なったものが含まれている。

「さて、戦争指導は闘争の整序かつ指導 (die Anordnung und Führung des Kampfes)³⁾ である。この闘争が個別的な行為であるとしたら、それをより一層区分する根拠は存在しない。だが、闘争は、多かれ少なかれ違いはあっても、かなりの数の、個別的でそれ自体で完結している行為、つまり、私たちが諸戦闘 (Gefechten) と呼んでいるものから成り立っている。……これら戦闘が新しい統一 [単位] を形成するのである。そのことから、まったく異なった活動が生じる。一方は、これら戦闘をみずからにおいて整序し指導する活動であり、他方は、戦争目的へと諸戦闘を結合する活動である。前者は戦術、後者は戦略と呼ばれる。」(VK: 270-1/II-1)

要するに、戦場で実現される複数の戦闘を整えて指導するのが戦術であり、それら戦闘の成果をより高次の戦争目的へと結びつける活動が戦略ということになる。ここで戦闘の目標 (Ziel)、つまり、当面する敵戦闘力の撃滅は、それ自体で完結するものではなく、そうした戦場での勝利を結合して、戦争そのものの目的 (Zweck) である講和の達成にいたる道筋をつけるのが戦略なのである。Ziel と Zweck という異なった用語を導入して、クラウゼヴィッツは戦術と戦略とが目指すものの決定的な差異を際立たせている。

ところで、戦争の目的が敵の打倒などではなく、講和であることは、当時の軍事理論家たちが等しく主張していたことであった。例えば、ハインリヒ・フォン・ビューロウは「あら

ゆる軍事作戦の目的は、すべからく講和である」と述べていたし (Bülow 1799: 12), ヨーハン・フリードリヒ・フォン・ロスサウは「戦争の目的達成は、その本性からして、講和でなければならない」といい (Lossau 1815: 4), また、哲学者だったヴィルヘルム・トラウゴット・クルークは「戦争の直近の目的は、敵の征服でしかないが、より先の最終的な目的は、勝利によって惹起される平和たらざるをえない (戦争から平和が生まれる *pax paritur bello*)」(Klug 1815: 5) といっている。戦場での勝利はなにも最終目的ではなく、それは究極的な目的である講和を実現するためであることは、共通認識だったのである。ここでも、戦闘での勝利の追求と、講和という最終目的の達成とは、同一の過程のなかにありながら、明確に差異化されることになる。クラウゼヴィッツは両者を、統一された論理によって処理している。

戦闘そのものにおける成果の達成が戦術の領域であるとしても、それを講和に結びつける方策は、戦術とは別個の次元での活動である。かくして、理論的に戦術と戦略とは異なった位置に置かれることになる。両者はいつてみれば活動のベクトルが異なっているのである。

こうした考察を重ねた結果、クラウゼヴィッツが最終的に到達した戦略と戦術の定義は「戦術とは、戦闘における戦闘力の使用についての教説であり、戦略とは、戦争目的のための戦闘の使用についての教説である」(VK: 271/II-1) というものであった。のちに少し詳しく述べるが、実はこの定義は彼が1804年にすでに定式化していたものであった。この定式化こそが、彼を戦略概念の歴史的展開のなかで、突出した存在にさせたのである。

上記の定義がユニークであることを際立たせるために、それまでの歴史的経緯を振り返ってみたい。

戦略概念の拡散

戦略 (strategy, stratégie, Strategie) ということばは今日では、いたるところで多用されている。経営戦略をはじめとして、教育戦略, IT 戦略, はてはテニスやゴルフの必勝戦略, コンピューター・ゲームの攻略戦略にいたるまで、戦略はきわめて広範な分野でごく普通に消費されているのである。戦争理論の領域に限ってみても、熱核戦略から非対称戦略, 宇宙空間にまで拡大された軍事戦略から、高度に組織化されたテロリズムへの対抗戦略など、戦略に包含される領域はきわめて多岐に及び、膨大な数の著書や論文がそれをめぐって発表されてきている。戦略は18世紀末に近代ヨーロッパ語の地平に軍事関連の概念として (再) 登場し、やがて戦争理論の基本用語となったのだが、今日ではその使用範囲をはるかに越えて、軍用語からはほぼ完全に離床してしまっているといつてよい。

このような拡散は戦略の意味内容を希釈して曖昧なものにしている。なにが戦略なのか、もはやほとんど判らなくなっているのである。ヒュー・ストローンはこのような事態を、戦

略概念の「実存的危機」(the existential crisis)と呼んでいる。彼はいう。

「『戦略』ということばは、普遍性を獲得してしまい、そのことがことばから意味を奪い取って、陳腐さだけをあとに残している。政府は教育、社会保険、年金、都心部での住宅といった諸問題に取り組む戦略を持っている。広告会社は、化粧品や衣服を売るための戦略を持っている。戦略研究は、国際関係学部よりも、ビジネス・スクールのほうで、より青々と繁っているのである。」(Strachan 2005: 33-4)

戦略はすでに概念としての厳密性を欠く事態に陥っている。大まかにいうなら、達成すべき目的と、そのために投入可能な手持ちの諸手段とのあいだでの合理的な関係を考察する場面で、戦略はごく普通に使われているのだが、こうした関係性の考察を、例えばミクロ経済学では、経済合理性(制限つきの諸変数のもとでの目的関数の最大化)として早くから定式化している。それは理念的な「経済人」(homo oeconomicus)の行動原理であって、それだけに集約されるのであれば、一切は経済合理性に還元されてしまうのであり、それよりもはるかに豊かな土壌から生まれて、いまだに多大な発育の余地を保っている戦略という概念は、本来的に無用ということになる。

このような事態に直面して、改めて厳密な概念史が求められている。そうした模索のひとつとして、ベアトリス・ホイザーは『戦略の進化』(Heuser 2010)という、本文500ページの著書を刊行した。彼女はさらに、『クラウゼヴィッツ以前の戦略』(Heuser 2018)で、戦略概念が15世紀から19世紀前半まで、どのような変遷をとげたのかを追求している。また、ローレンス・フリードマンが『戦略 ひとつの歴史』(Freedman 2013)という、750ページ(!)にも及ぶ大著を上程している。彼らはともに、戦略概念がどのように生成し、いかに多様な分野へと拡散してきたかを、きわめて多角的かつ精力的に示してくれている。その全体を紹介することさえ困難である。とはいえ、両書はきわめて広範囲な領域をカバーしているため、戦略概念の生成に関するきめ細かい検討という点で、十分に私たちを満足させてくれている。

ストローン、ホイザー、フリードマンたちは、問題の外延や大まかな歴史を示しているが、概念形成の機微に立ち入った議論をそこに求めることはできない。18世紀後半に、戦略がもともとは戦術の一部としてはじめは別の名称で呼ばれ、ついで、戦術とは別個の概念領域として括り出されて、かなり長きに渡った理論的な模索を経て、戦争理論の重要な一部であったこと、そのさいに古代ギリシアやビザンツ帝国における議論が参照軸として強く働いていたことなどとの関連が、そこではほとんど看過されてしまっているのである。

本稿では、そこにstrategyの語源である、古典古代以来のstratēgiaが関与していたことを、まずは確認したうえで、ついで、クラウゼヴィッツによって規範的な概念として明確化されるまでの議論を一瞥し、いわば戦略の系譜学とも呼ぶべきものの一部の、おおまかな輪郭を提示してみたい。

戦略概念の生成

戦略についてなんらかの歴史的概観を試みる企てはすべて、戦略が古代ギリシアの *stratēgia* を語源としていることに触れている。例えば、今村伸哉はこう書いている。

「戦略 (strategy) の語源は古代ギリシア語の *straos* に由来しているといわれているが、意味は軍隊あるいは主権であり、この用語は *strategos* に変化し、この意味は *strategoma* と同様に将軍と訳されている。つまり古代においては戦略の用語はなかったということである。……十八世紀末になってジョリ・マイゼロワが戦争術から戦略という新語を取り出して用い始め、戦略概念と戦術概念の区分を行った。」(今村 2017: 256)

ギリシア語に関わる部分は、かなりいいかげんである。古いギリシア語には *straos* という単語はないので、おそらくこれは *stratos* の誤記ないし誤植であろう。その *stratos* の意味とは、狭くは野営、野営した軍隊であり、一般には軍隊、軍勢、武力のことである (Liddell and Scott's Greek-English Dictionary)。今村がいう *strategoma* とはなんのことなのか判らない。少なくとも Liddell and Scott には、この単語は収録されていない。多分、将帥の行為を現す *stratēgēma* の誤記に違いない。

こうした誤りはあっても、戦略の語源が *stratos* と関わっていたが、そこには今日的な意味での戦略の意味はなかったこと、戦略と戦術とが分離把握されたのは 18 世紀フランスの軍事理論家だったマイゼロワからだったことという大筋はそこで把握されている。

ついでながら、*strategy* の語源を *stratos* とのみ直接に結びつけるのは正確ではない。ギリシア語の *stratēgia* は、名詞の *stratos* と「率いる」という動詞 *agō* (不定詞形では *agein*) との双方を語幹にした複合語なのである。つまり、*stratēgia* とは、兵を率いる仕方であった。戦前日本の兵語には「帥兵術」ということばがあったが、それがほぼぴったりと当てはまるといってよいであろう。

私にしても、古代ギリシアの兵制については、まったくの素人であって、それを考えるさに必要とされる文献もわずかにしか持ち合わせてはいないが、少なくともつぎのことは確言できる。

古代ギリシアといっても、*stratēgia* は特に都市国家アテナイの歴史と密接な関係を持って成立したことばである。周知のように、古代のアテナイでは、BC509年に画期的なクレイステネスの改革が行なわれ、古代民主主義の基礎が確立した。この改革によって、従来の血縁関係に基づいた社会組織は廃棄され、それに替わって政治・軍事は 10 の部族からなる地縁集団が担うようになったのである。集団形成の基本原則が血縁から地縁へと切り替わったことの歴史的意義は、フリードリヒ・エンゲルスが『家族・私有財産・国家の起源』第 5 章で、見事に描出している。エンゲルスの『起源』は特に人類学的部分に関して、今日では

さまざまな批判に晒されているが、クレステネス改革の画期性についての彼の記述は、いまだに正確だといってよい。

軍事組織もそれにともなって、変革された。いまや軍隊は、市民が構成する民会 (ekklēsia) での選挙で選ばれる 10 名の stratēgos (複数形は stratēgoi) が指揮することになった。その任期は 1 年だが再選可能である。いわゆる名望家がそれに選出されることも多く、よく知られている例としては、アテナイで政治的に辣腕をふるったペリクレスも stratēgos になっている。彼ら全員がひとつの集団として戦争指導を担当したわけではなく、必要に応じて、ひとり、あるいは数人でその任に当たった。発生的にいうなら、まず stratēgoi があって、ついで彼らが戦争において駆使する stratēgia が成立する⁴⁾。Stratēgoi は直接に兵士を統率したわけではない。彼らのもとには、taxis と呼ばれる、各々 1300 名のホプリタイ=兵士からなる部隊が合計で 10 隊存在していた。この taxis は phylē と呼ばれる、ポリス (都市国家) を構成する非血縁的な集団から選出され、taxiarkhos (= taxis の指揮官) に率いられていた。つまり、市民で構成された民会で選ばれた複数の stratēgoi にポリスの軍事的指導が委ねられ、彼らが taxis という下位単位の戦闘集団を組み合わせ駆使し、戦争を遂行したのである。Taxis そのものの指揮を直接に担ったのが taxiarkhos である (Cf. Vidal-Naquet 1981 : 133-4)。この taxis と戦法を意味するギリシア語の taktika とのあいだに、言語的な関係があるかどうかということだが、私は手元にそれを云々できる資料を持っていない。それゆえに、きわめて豊かな古典的知識を持っていた、18 世紀フランスの軍事批評家だったジョリ・ド・マイゼロワの見解を挙げるに留める。彼は taxis が戦術 (tactique) の語源だと述べている。彼によれば「戦術ということばは、ギリシア語の taxis から来ていて、それは序列、配列、配置を意味する。それゆえに、軍事的な意味では、このことばは、なんらかの部隊を構成する将兵や、軍を構成するさまざまな部隊、それらの運動、行動、それらのあいだにある連関にかかわる位置関係のイデーを与えてくれる」(Maizeroi 1777 : 2) ののである。ただし、私にはこの語源論が正しいかどうか、Pauly-Wissowa はもとより、Oxford English Dictionary や Trésor が自在に仕えない現在、確かめることができないでいる。

とはいえ、stratēgia のレヴェルと、戦闘を直接に担う taxis が働くレヴェルとは純然と区別されていたのであって、前者は民会の統制下にありながら、後者を戦争で使用するという複合構造が存在していた。したがって、stratēgos も戦争指導の責任を負いながらも、ポリス=政治に制約されたうえで、下位部隊である taxis を指揮したわけである。このように stratēgia は、戦争指導の中軸を構成する術であり、それを実行する stratēgoi には民会で選出されるという政治的制約が課せられていた。民会は stratēgoi を任命・罷免する権限を持ち、敗北の責任を問うて死刑にすることもできた。

すなわち、ここですでに政治が戦争指導の上位に立っていて、その戦争指導には

stratēgia という最高レベルと、taxis が担う下位レベルがあるという、構造的な関係が成立しているのである。マイゼロワの意見が正しければ、すでにここに戦略と戦術という区分が、臚気ながらであっても姿を見せている。

古代ではマケドニアのアレクサンドロス（大王）、近代ヨーロッパでは、スウェーデンのグスタフ・アドルフやカール 12 世、プロイセンのフリードリヒ 2 世（大王）、そしてナポレオン・ボナパルトのように、政治的な最高権力を掌握する国王や皇帝でありながら直接的な軍事指導者でもあった例もあるが、近代では、フランス、イギリス、スペイン、オーストリアなどで基本的に、国王や皇帝が最高将帥を任命し、彼らに具体的な戦争指導をまかせることが多かった。彼らは戦時下にあっても政治的全権を掌握していたわけではなく、アスペルンでナポレオンを打破したことで有名なカール大公は、オーストリアの軍事大権を委ねられていたが、その彼であってもヴァグラムの敗北のあとの独断専行をとがめられて、やがて軍への関与から遠ざけられている。

政治権力が軍事活動の上位に立って、後者を間接的に統率するのはアテナイにおける民会と stratēgoi との関係、別個の歴史的環境のもとで再現しているのである。したがって、古代の stratēgia を、近代的な意味での戦略と完全に切断してしまうことは正しくない。少なくとも古代のアテナイにおいては、政治と戦争指導との関係は、前者の優位のもとにしっかりと把握されており、そのような関連のなかに stratēgia は位置づけられていたし、そのレベルでの戦争指導と、taxis が働くレベルとは明確な位階構造を持っていたのである。

政治—軍事、戦略—戦術という位階構造は、今日でもおおまかにはその姿を保って存続している⁵⁾。なぜこのような一見すると超歴史的にさえ見える「連続性」が生じたのであろうか。この疑問への答えは、カール・マルクスが与えてくれている。

マルクスは『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』という、いまだに不思議な魅力を湛えているテキストにおいて、つぎのように述べていた。

「人間はみずからに固有な歴史を創るが、しかしながら、みずからが選んだ状況のもとで好きなようにそうするのではなく、直接的に前存しており、所与であって、伝承された状況のもとで (unter unmittelbar vorhandenen, gegebenen und überlieferten Umständen) でそうするのである。すべての死せる世代の伝統が、悪夢のように生者の頭にのしかかっている。そして、生者たちは、みずからと事態とを変革して、いまだに現存していないものを創出する作業に携わっていると見える、まさにそうした革命的危機の時代に、不安に駆られて過去の亡霊どもに懇願して、みずからに奉仕させようとして、その名前、戦いの雄叫び、衣裳を借用するのだが、それはこれらの古くからの立派な衣裳をまとめて、借り受けたことばで、新しい世界史場面上演するためなのである。」(Marx 2007 : 9-10 [訳 : 16])

ここでマルクスが言っているのは、つぎのようなことである。歴史的な変革期においては、「いまだに現存していないもの」(noch nicht Dagewesenes) を把握しなければならない事

態が生じるが、その把握のためには、目下のところ手持ちの、これまで受け継がれてきたことばを借り受けて、古い衣裳でとりあえずは新しいものを表現しなければならないということである⁶⁾。だからこそ、変革期はしばしば復古という外観を身に纏うのである。Stratēgiaが近代ヨーロッパ諸語で復活するのは、そうした事情からである。

ここで詳しく述べることはできないが、少なくとも18世紀末までの近代ヨーロッパの、とりわけフランスの戦争理論は、古典古代モデル（それがいかに現実と離れようと、まさしくピュイセギュールに代表されるように⁷⁾、ホメロスにまで遡る古典文献から抽出されたそれ）の呪縛から自由ではなかった。新しい戦争理論が切実に求められていた時期、その輪郭を臆気ながらも描くためには「過去の亡霊ども」(die Geister der Vergangenheit)を召喚して、彼らの名前や雄叫びや衣裳を借用することからはじめざるをえなかったのである。実際、フランス革命は、古代ローマからの借用語で満ちていた。はじめから新しいことばのみずからを語ることはできるには、1917年のロシア革命を待つ必要があった。ロシア革命は、マルクスからレーニンにいたる思想的営為のゆえに、もはや「過去の亡霊ども」の語りを必要としなかったのである。

Stratēgiaはこのような経緯を経て、近代ヨーロッパ語のなかに蘇ることになる。

戦略の登場

この戦争指導の上位概念としての stratēgia は、決してそのまま後代に引き継がれたわけではない。古代ローマではギリシア語の stratēgia に対応するラテン語の strategia は、ほとんど使われておらず、将帥の手腕や策略を意味する strategema (〈stratēgēma〉) がわずかに stratēgia の面影を留めているにすぎない。ローマの戦争理論の概要は、紀元4世紀にウエゲティウスの『軍事問題要論』(Epitoma rei militaris) にまとめられているが(著者や成立年代については諸説ある)、そこには strategia という用語は登場していない。同書の第3部末尾に当たる第26章「戦争の一般的諸規則」(Regulae bellorum generales) は、格言形式による戦争の諸原理・諸規則の列挙であって、確かにのちには戦略の構成要素となるものが含まれていた。マックス・イエーンスはそれを「戦術と戦略」というタイトルで紹介している(Jahns 1:114-7)。ただし、ウエゲティウス自身が直接に戦略ということばを使っているわけではない。

もっとも、私はローマ帝国後期からビザンツ帝国にいたる時期に書かれた兵学書についてはまったくの門外漢であって、ヴァン・クレフェルトによるその要約(Van Creveld 2005: 47-59)程度の知識しか持っていない。この空白はいずれなんらかの形で埋めるつもりである。

いずれにしても上級の戦争術についてのおぼろげな自覚がなかったわけではないにしても、

それを *strategia* と呼ぶことは、ローマからビザンツにいたる歴史のなかには見出せないのである。

戦略と戦術という概念カップルは、いまではごく当たり前だと受け止められているが、それが成立する過程は、決して平坦ではなかったし、まだ十分に探求されてもいない。本稿はそのためのスケッチの一部でしかない。

近代的な戦争理論の形成に当たって大きな貢献をなしたのは、ニッコロ・マキャヴェッリだが、ここでは彼についての言及は避けて、話を18世紀前半まで飛ばすことにしたい。この時期の戦争に従事しながら、それをいち早く理論化したのは、イタリア生まれで、ハプスブルク帝国に軍人として仕えて、東はオスマン・トルコの中部ヨーロッパ進出と戦い、西ではライン地方でチュレンヌ指揮下のフランス軍と華麗な戦略的機動戦を繰り広げたライモンド・モンテクッコリ (Raimondo Montecuccoli, 1609-80) であった。彼は生前にみずからの経験と、思想的な研鑽とを練り上げて、いくつもの論考を残している (すべて没後の出版である)。それらのうち軍事書関係では、『戦争概論』(執筆は1641年)、『戦争術について』(同1653年)、『ハンガリアにおけるトルコとの戦争について』(同1670年)、『戦闘について』(同1673年)が重要である。すべてイタリア語で書かれている。なかでも『戦争術について』は、後代に与えた影響の大きさからして、モンテクッコリの代表作だといってよい。モンテクッコリは日本ではほとんどまったく知られていない軍人・思想家であり、したがって、研究の蓄積がまったくない。しかし、マックス・イエーンズがその浩瀚な『戦争科学の歴史』⁸⁾の第2部において述べているように、「17世紀後半のあらゆる軍事思想家を、ひとりの人間が凌駕している。……モンテクッコリである」(Jähns 2: 1162)。

しかし、そのモンテクッコリの著述には戦略どころか戦術さえも登場していないのである。彼のいう「戦争術」(*arte bellica*)のなかでは「装備」(*apparecchio*)や「配置」(*disposizione*)と並んで、「作戦」(*operazione*)が語られている。ここでいう作戦とは、「決意をもって、秘密裏かつ迅速に、行軍・宿営・戦闘を実行すること」(Montecuccoli 1973: 7, 49-59)とされる。彼はさらに「将帥に求められる資質」を「生来的」(*naturali*)と「獲得的」(*acquistate*)とに分けたあと、後者のうちに「理論と実践による戦争術」(*l'arte della guerra per teorica e per pratica*)を含ませているが (Ibid: 10)、この戦争術の内容についてのより詳しい分析はない。

実際のところ、モンテクッコリでは戦略と戦術という概念カップルどころか、戦術そのものでさえも用語として不在であって、近代の戦争理論がその揺籃期において、後代の概念構成とかなり異質だったことがそこから判る。ヴァン・クレフェルトによれば、ヨーロッパで戦術が概念として登場するのは、モンテクッコリの晩年以降だという (Van Creveld 2005: 77-8)。

戦術 (*tactics, tactique, Taktik*) がギリシア語の *taktika* を語源に持つことは明らかだが、

後者はさらに、動詞 *tassō* (アッティカ方言では *tattō*)、つまり、秩序づける、整列する、正しい場所に設置することから造られた名詞である。古代ローマでは *tactica* のほうも *strategia* と同じく用いられてはおらず、通常のラテン語辞典には出てこない。つまり、戦略も戦術もカップルとしてどころか、単語としても使用されなかったのである。先述のようなギリシア (アテナイ) での戦争指導の理論的構造化は、ローマ時代にはとりあえず消滅したといつてよい。

戦術がどのように、戦争のある部分を表記するために採用され、近代ヨーロッパでやがて戦争理論の中心的な位置を占めるにいたったかについては、残念なことに、これまでまとまった研究はないし、私もそれを追求するだけの時間的・文献的余裕がない。ただいえるのは、少なくとも 18 世紀中葉、モンテクッコリが活躍していた時代からほぼ 1 世紀以上たった時期には、戦術は戦争を考えるための基本概念となっていたことである。そのことをもっとも明確に示してくれているのが、ギベールの『戦術の一般的試論』である。

ギベール——戦術への過剰積載

ジャック・アントワヌ・イポリト・ド・ギベール (Jacques Antoine Hyppolyte, comte de Guibert, 1743-90) が 1772 年に刊行した『戦術の一般的試論』は、当時のフランスで一大反響をもたらした著書である。さすがに王政の否定は含まれていないが、啓蒙の合理主義に基づいた鋭い政治批判や、市民軍の可能性、同時代に激しく争われていた行軍・戦闘序列の在り方をめぐる複雑な論争⁹⁾への介入、プロイセン (フリードリヒ大王) 方式の賞賛など、刺激的な話題に対する歯切れのよい文体での提唱に満ちていて、そのために彼を軍事論壇だけでなく、一躍サロン文化そのものの寵児に押し上げたのである (サロン文化の華だったレスピナス嬢との恋愛と破局は有名である)。しかし、私たちにとって重要なのは、『一般的試論』が戦術概念を、いってみれば極限まで拡張し、それによってもはやその概念では収納しきれないなものかに変容させていることである。

ギベールはまず、戦術こそが戦争科学の根底をなしていると断言する。

「大多数の軍人にとっては、戦術は単に戦争 [科学] の 1 部門にすぎないが、私にとっては、それはこの科学の土台であり、この科学そのものなのである。なぜなら、戦術は部隊を編成し、整列させ、移動させ、戦わせることを教えるからである。戦術は小部隊や大部隊の資源である。というのも、そののみが数を補い、多数の将兵を操りうるからである。最後に、戦術は人間、軍、それに地形その他の環境の認識を含む。なぜなら、これらの認識をすべて結合したものが、部隊の諸運動を決定すべきだからである。」(Guibert 1803 1 : 136)

しかし、一切を単純に戦術としてだけ記述するのでは不十分である。彼はこうつづける。

「戦術はふたつの部分に分けられるべきである。一方は初等的かつ限定的で (*élémentaire*

et borné), 他方は複合的かつ崇高的 (composée et sublime) である。

第1のものには、大隊、騎兵中隊、連隊の編成・教育・教練の詳細すべてが含まれる。この部分に関しては、君公が發布した多くの訓令があり、下級将校あての多くの体系があり、また、多くの対立する見解がある。……

第2の部分は、正しく述べるなら、将帥たちの科学 (la science des généraux) である。そこに含まれるのは、軍の運動、行軍序列、戦闘序列といった、戦争の大いなる諸部分のすべてである。この部分は、それゆえに、位置の選択と国土の認識とについての科学と同一になる。これらふたつの部分が唯一目的としているのは、部隊の配備をより確実に規定することだからである。そこには要塞の科学が含まれる。というのも、要塞は部隊のために構築されるべきであり、また、部隊と関連しているべきだからである。」(Ibid : 136-7)

ギベールはさらに、こう述べている。

「私は戦術をふたつの部分、初等戦術 (Tactique élémentaire) と大戦術 (grande Tactique) とに分割した。以降、この分割を追求したい。第1の部分で、私は軍の構成に関わるすべての兵科、つまり、歩兵、騎兵、砲兵、軽装部隊を扱うであろう。第2の部分においては、私はこれらの異なった兵科を糾合して、ひとつの軍を構成しよう。この軍が戦争を遂行するさいの、すべての運動について、私は実践的な理論を与えることになるであろう。この理論につづいて、また、私の計画が戦術に属するすべてを内包するために、要塞科学と地形の認識とが、戦術、とりわけ会戦とのあいだで持つべき関連を探求したい。さらに私は、自軍の生計を維持するための方策と、この点でなしうるであろう有利な諸改革とも言及したい。」(Ibid : 154)

つまり、各兵科ごとの原理・規則を扱う部分と、諸兵科を統合運用する原理・規則の部分とへの分割である。

ギベールは戦術のなかに、軍隊の編成・訓練・宿営・行軍・戦闘のすべてと、さらには要塞の攻防術から兵站の組織化にいたるまでの、広範な内容を収納している。それが大戦術という用語で語られているものにはかならない。

そのギベールは自著に対する批判 (主にメニール＝デュランによる) に応答するために、1779年に『現代戦争体系の擁護』を出版した。実はこの弁明書において、彼はいくつもの点で重大な理論的後退を示しているのだが、それにここで言及する必要はあるまい。私たちにとって重要なのは、同書でギベールがはじめて戦略という用語を採用していることである。ただし、それは1箇所「戦略、あるいは、軍の戦術」(la Stratégique, ou Tactique des Armées) とあるにすぎない。「軍とは、糾合されたいくつもの部隊にほかならない」とされるので (Guibert 1803 3 : 1, 3), 先に引用しておいた大戦術の定義とまったく同じである。彼がなぜ少々唐突に戦略ということばを持ち出したのか、その理由は分らないが、マイゼロワの影響によるか、あるいは、1770年代にはすでにフランス語やドイツ語で表題に戦略

と戦術とを並記した著書がいくつも刊行されているので¹⁰⁾、それに引っ張られた可能性もある。いずれにせよ、ギベールの場合、大戦術がそのまま横滑りして、ようやく戦略という新しい皮を被ったのである。

師団組織と戦略

ストローンは戦略という観念が18世紀後半に生まれたのは、「一方では職業的常備軍の成長の、他方では啓蒙主義の産物」だったと指摘している (Strachan 2005: 35)。しかし、彼はひとつの重要な要素を忘れている。それは軍隊組織の変化であって、具体的には師団（のちにはさらに軍団）という組織が構想され具体化されることにほかならない。

師団 (division) という戦闘組織は、はじめモーリス・ド・サクス (Maurice de Saxe, 1696-1750) によって構想された。彼は没後に刊行された『わが夢想』において、ローマのレギオンやケントゥリオンにヒントを得て、諸兵科を組み合わせた独立性の高い軍隊組織を構想していた (Cf. Saxe 1977: 26ff)。彼にあっては、それはまだ固有の名前も持たないただの「夢想」だったが、しかし、大規模にふくれあがって機動性を欠き、しかも複数の戦線で同時に戦わなければならない状況に置かれた軍が、それに対応した軍隊組織を必要としていたのであり、7年戦争でフランスのド・ブロイ元帥 (Victor-François, duc de Broglie, 1718-1804) はサクスの「夢想」を現実にする実験を開始している。なお、シャルンホルストによれば、7年戦争では、プロイセンのフェルディナント大公もド・ブロイと似たような組織を試していたという (Scharnhorst 1983: 143-6)。敵対するふたつの軍隊が、似たような組織を構想していたのである。

ド・ブロイの試みの細部は、ここで扱う必要はない (Cf. Quimby 1968: 94-5)。それはギベール、さらにはブルセ (Pierre de Bourcet, 1700-80)¹¹⁾ によって、より理論的に洗練されて、やがて1791年の軍令 (Ordonnance) に結実する (Colin 1907: 263-73)。この軍令のもとでフランス革命は反革命干渉戦争を勝ち抜き、その内実をナポレオン・ボナパルトへと引き継いだのである。

師団はさらに、ナポレオンのもとでいくつかが纏められ、軍団 (corps) となる。一定期間独立行動が取れる師団・軍団は、迅速な行軍の妨げになっていた砲兵や兵站組織の改善と相俟って、大軍を分割運用することを可能にした。いわゆる分進合撃が実現する。シャルンホルストはそれを「マレンゴ会戦について」(1800年) という、短いが透徹した論文のなかで、「決して集中して留まらず、しかし、つねに集中して戦う」(nie concentrirt zu stehen- aber sich immer concentrirt zu schlagen) と簡潔に表現している (Scharnhorst 1983: 121)。ついでながら、レフ・ダヴィドヴィチ・トロツキーが第4インタナショナルのローガンとして掲げた「別個に進み、共に撃て」は、このナポレオンの分進合撃戦略を政略へ

と移し替えたものである。

クラウゼヴィッツはこのような組織的変革を『戦争論』において、軍の「全体」(das Ganze) についての意味の変容として把握している。彼はいう。「戦争においては、世界一般におけると同様に、一切が連関のなかにあつて、ひとつの全体 (ein Ganze) に所属している」(VK: 316/II-5)。問題は、この全体の内部構成に関わっている。

「最新の戦争術は、軍隊にひとつの有機的な区分 (eine organische Einteilung) を与えた。そこでは主要部分 [のおのおの] は小さな全体だと見なされ、[この小さな全体は] 戦闘において、大きな全体のすべての作用を生みだしうるのである。」(VK: 552/V-10)

このような全体は、旧来のそれとは決定的に異なっている。旧来の軍隊は「ひとつの単純な全体」(ein einfaches Ganze) (VK: 534/V-7), 「ひとつの不可分な全体」(ein ungeteiltes Ganzes) (VK: 556/V-10) であった。それは鈍重で混乱した将兵のアマルガムにすぎなかった。「かつては、主軍が自立したいくつかの師団に分割されておらず、行軍にあつてもつねにひとつの分割不可能な全体 (ein unteilbares Ganzes) のように考えられていた」(VK: 845/VI-30) のである。

それに対して、近代の軍隊はひとつの全体を構成してはいるが、内部において分節化されている。

「いまや、軍隊はその基本的な延長——配備の幅である——において、まったく同質的な諸分節から構成されるようになり、かくして、軍隊を任意の数の断片に分解することも可能になった。軍隊は、相互に類似し、かつ、全体にも類似する諸断片だけを持つようになった。このためにいまでは、軍隊は唯一の断片であることをやめて、柔軟でしなやかな、ひとつのきわめて分節化された全体 (ein viel gegliedertes Ganze) となったのである。部分は全体から無理なく分離され、また、ふたたび全体に合流できる。」(VK: 519/V-5)

このように、クラウゼヴィッツが念頭に置いていたのは、分節化された軍隊であり、各分節が全体から分離される場合でも、そのひとつひとつがまた全体として活動しうるような柔軟な組織構造であった。師団がそれを提供した。それは「最小の自立的な、つまり、あらゆる兵科から複合された全体」(Schriften 2: 608) なのである。

フランスの場合、軍隊は1793年8月23日に国民議会が発した総動員令 (levée en masse) によって100万規模に膨れあがったが、組織的天才だったラザール・カルノーは、この大軍を先述した1791年の軍令を手本に組み上げ、若く有能な將軍たちに委ねたのである。

戦略と戦術とへの戦争術の区分は、クラウゼヴィッツにあつては、師団に代表されるような、新しい軍隊区分の出現と不可分であった。師団(さらには軍団)という、分節化された全体を最大限の戦術単位として、それらの運動を組み合わせる戦争目的へと統合するのが戦略なのである。

私たちは少し進みすぎたかもしれない。話を少しあとに戻して、戦略の出現と、その背景を考えてみよう。

マイゼロワと戦略の登場

戦略ということばを、近代ヨーロッパではじめて戦術と分離して使用したのが、ポール＝ゲデオン・ジョリ・ド・マイゼロワ (Paul-Gédéon Joly de Maizeroy, 1719-80) であったことは、だれしもが等しく認めるところである。今村の言及はすでに引用してあるが、ベアトリス・ホイザーも「私たちは彼に、フランス語への、したがって、西洋の日常的な諸言語への『戦略』という用語の導入を負っている」(Heuser 2016: 184) と述べているし、ヒュー・ストローンもそれを認めている (Strachan 2005: 34-5)。

このことに異論があるわけではない。しかし、マイゼロワについては、もう少し立ち入った検討がなされるべきであろう。彼が戦略という用語を導入した背景には、少し複雑な事情があるからである。

軍人としては、彼はモーリス・ド・サクスのもとで戦い、7年戦争にも従軍している。最終軍歴は陸軍中佐で、死去直前に准将となった。マイゼロワは当時の軍人としては群を抜いてギリシア語やラテン語に精通し、古典古代からビザンツ帝国 (東ローマ帝国) にいたる戦争理論の歴史に卓越した知識を持っていた。その仕事を評価されて、王立碑文・文芸アカデミーの準会員に選出されてもいる。軍人学者とでも呼ぶべき存在であった。

彼は『戦術教程』(1766年)においては、戦略ということばそのものを使わずに、こう述べていた。

「戦争の科学 (la science de la guerre) は、ふたつの部分からなる。ひとつは機械的な部分 (le mécanisme) であって、そこには部隊の構成、軍令 (ordonnance)、宿営・行軍・戦闘の仕方が含まれている。これらすべてを諸原理によって (par principes) 提示し、諸規則を与えることが可能である。他の部分は崇高 (sublime) であって、将帥の頭のなかにある。それは時間、場所、状況に依存し、無限に変化して、決して2度とは完全に同じものが見出せない。

戦闘の日には、将帥は部隊の配置を定め、命令を下してしまっているのだから、彼が考えるのはただ、敵の運動や行動の展開を観察することだけである。[敵の] 誤った行動を利用して、決定的な一撃をなす瞬間を掴むのは、眼光の仕事 (l'affaire du coup d'oeil) である。」(Maizeroy 1766 2: 401)

ここではモーリス・ド・サクスが『わが夢想』ですでに提唱していたこと¹²⁾ 以上は語られていない。原理や規則によって解明可能な部分と、将帥の天分に委ねられざるをえない部分という区別は、モンテクッコリに端を発して、サクスによって一挙に広範な流通を見てい

る。この「崇高」な部分は上級戦術とか大戦術といった名称で呼ばれたが、前出のギベールの例にあったように、いずれの場合でも、戦術という枠組みの内部での区分であった。例えば、ゴットハルト・クリストフ・ミュラーの『軍事百科』では、戦略、あるいは、将帥の科学 (die Wissenschaft eines Feldherrn) とは、そこには本来なら、純粹戦術や応用戦術に所属する数多くのものが所属してはいても、一般に戦術の一部 (ein Theil der Taktik) だと見なされている」といわれている (Müller 1796 : 636)。詳論は避けるが、戦略が軍事用語のなかに定着したかに見える 18 世紀末から 19 世紀初頭の時期においても、それが戦術とどう違うのかについては、確定した見解などなかったものであり、このためにフランスのジョルジュ・ド・シャンブレール将軍は 1829 年にいたっても、ビューロウやジョミニを引きながら、彼らのあいだで戦略の定義はまったくばらばらであって、おかげで「私は一度たりとも、戦略ということばを使う必要性を感じないでいる」とまで断定している (Chambray 1829 : vii, 169-71)。つまり、戦略はことばとして導入されたが、論者によってその意味内容はまるで異なっており、したがって、理論的に使用に耐えないとされたのである。

それでは、それほど不安定な用語を、マイゼロワはなぜ、どのように戦争理論に持ち込んだのであろうか。

ほとんどの論者は、用語としての戦略の出現を、彼の『戦争の理論』(1777 年) だと見ている。だが、それは決して唐突なものではなく、既述した古代ギリシアでの *stratēgia* との関係ありあいのなかで選ばれていたのである。

近年、マイゼロワの仕事を詳しく調査したアレクサンドル・ダヴィドによると (David 2010)、東ローマ帝国皇帝のレオン 6 世 (AD866-912) の著書『戦術と将帥について』を、彼は 1771 年にギリシア語からフランス語に訳していた。そのなかですでに、戦略の用例がある。このレオン 6 世の翻訳を繙いてみると、マイゼロワはそこでつぎのような註釈をほどこしていた。それは同書の第 1 部への「翻訳者の考察」(Observation du traducteur) にある。少し長文になるが、それを引用しておきたい。

「レオン皇帝が戦術と将帥の機能の章で与えた区別は、きわめて驚くべきものであり、彼の定義もきわめて正確である。戦術ということばは *taxis* から来ているが、それは序列・配置・配列を意味している。それゆえに、戦術とは、部隊を整える術であり、また、協力して行動すべきすべての多様な諸部分を配列する術にほかならない。それはまた、それらの諸部分を、採用さるべき一切の作戦にとって、もっとも適切に演習や機動で構成する術である。とはいえ、将帥の科学 (*la science du Général*) はきわめて広大なものである。そこには、戦術以外にも、非常に多くの別の部分が含まれる。この科学こそが、計画を立て、準備し、指導するのである。それは規律の維持、軍隊の保安、必需品の調達、さらには軍の拠点となる場所の選定に注意を払う。野営地を選んで要害化する術、都市を攻撃・防御する術は、戦術と同様に、将帥の科学である、戦争の普遍的科学 (*la science universelle de la guerre*)

の部門にすぎない。それをギリシア人は戦略 (stratégique), *stratēgia* とという用語で表現した。このことばは将帥 (Strategos) から来ている。

〔将帥とは〕軍の首脳のことである。戦略はそれゆえ、まさしく指揮する術であり、将帥の手中にある一切の手段を、適時かつ巧妙に利用する術、彼に下屬しているすべての部分を動員して、成功に向けて配列する術である。この科学はきわめて崇高 (sublime) であるので、精神の天分 (les talens de l'esprit) だけでなく、魂の徳 (vertus) をも必要とする。〕
(Leon 1771 1 : 5-6)

レオン6世の原文は、ミーニュの『ギリシア教父集』に収録されているので容易に手に入るが、そこまで手を伸ばす必要はないであろう。ここでは古代ギリシアからビザンツ帝国へと継承された *stratēgia* という概念が、マイゼロワによって近代ヨーロッパ言語に移植されたことを確認できれば充分である。このマイゼロワの仏訳から重訳されたドイツ語版の表題は、『哲人皇帝レオンの戦略と戦術』(Kaisers Leo des Philosophen Strategie und Taktik, 1779) であった (筆者未見)。これはおそらく、戦略と戦術とを分離して掲げたはじめてのドイツ語表題であろう (Cf. Jähns 3 : 1831-2)。つまり、戦略は古代ギリシアに端を発し、東ローマ帝国で密かに保存されたあと、近代でまずフランス語、ついでドイツ語に移されたのである¹³⁾。ギリシア語の *stratēgia* は近代の *strategy* と無関係どころか、ビザンツを媒介として、確実に繋がっていた。古典古代の *stratēgia* がただちに今日的な意味での *strategy* となったわけではないが、両者を結ぶ絆ははっきりと存在しており、両者のあいだに流れている通奏低音を無視することは許されないであろう。

ダヴィドによると、戦略は用語としてはさらに、マイゼロワのいくつかの覚書に出現する (David 2010 : 80)。それらの覚書を私は入手していないので追うことができない。そのため『戦争の理論』での所論に、ただちに立ち入ることにしたい。

同書でマイゼロワは、それまでの諸著作においてと同様に、戦争が古代ギリシアとローマにおいて科学として確立されていたことを強調する。「ギリシア人にとっては、戦争はひとつの科学だと見なされ、実践するまえに (avant de la pratiquer), その諸規則を知っておくべきだとされていた」と、彼はいう (Maizeroy 1777 : vii)。このことばは他の著書でも繰り返し主張されていて、彼が実戦という経験を経ることなくとも、まずは戦争の「科学」を科学として学ぶことができるという主張に繋がっている。戦争に関する有名な格言に「戦争は戦争でしか学べない」(la guerre ne s'apprend qu'à la guerre) というものがあるが、マイゼロワはそうした経験主義と真っ向から対立して、実践する以前に戦いの神髄は学ぶのであると主張しているのである。彼が根拠にしているのは、古代ギリシア、とりわけラケダイモン (スパルタ) での青年向けの軍事訓練学校であり、その制度を念頭に置いての発言である。それは平時において果たして戦争は学ぶのか、という設問に対する、彼なりの解答であった。

マイゼロワは古代の戦争論の探求のなかから、大戦術という概念では包括しえないなものかを、strategiaに求めたのである。それでは、彼のいう戦略とはなんであろうか。

ともあれ、彼のいうことを聞こう。

「ギリシア人たちが戦略と呼んだものは、とりわけて将帥の、そしてまた政治家の科学 (la science du général, même de l'homme d'état) である。戦術には、部隊を調教して、整列させ、移動させる術、あらゆる事態、あらゆる位置においても攻撃・防御する術が帰属するが、幾何学を土台とした多くの部分を抱合している。戦略 (la stratégie) は、より高等なものを含む。企図を形成するためには、戦略は時間、場所、手段、多様な利害関係を結合して、私がすでに述べておいた一切を考慮して、弁証論 (la dialectique) の、つまり、精神や理論的推論のもっとも崇高な能力 (la faculté la plus sublime de l'esprit, du raisonnement) の管轄に入ることになる。一方 [戦術] は、確実な諸規則に容易に還元される。というのは、要塞術と同様に、まったく幾何学的だからである。他方 [戦略] は、そうしたことを許す余地がかなり少ないと思われる。なぜなら、そこには決して同一でない、無限の物理的・政治的・精神的状況があって、まったく天才に帰せられるからである。とはいえ、確実に提起でき、不変の基礎だと見なしうる、いくつかの一般的規則が存在している。」 (Ibid : lxxxv-lxxxvii)

彼は当時の思想的趨勢にならって、戦術を「幾何学的科学」(une science géométrique) だという (Ibid : xcix)。つまり、幾何学にならって一定の原理にそって解明できる、ひとつの科学だとするのである。戦術が幾何学的なものに支配されているという見解は、マイゼロワだけでなく、彼の前後にも多くの理論家に受け継がれている。そのような原理への信仰は、ロイド、ジョミニ、カール大公、さらにはアウグスト・ヴァーグナーやヴィルヘルム・フォン・ヴィリゼンたちに共有されていた。例えば、ヘンリー・ロイド (Henry Humphrey Evans Lloyd, c.1729-83) はつぎのように述べている。

「私の考えでは、このもっとも困難な科学は、ふたつに分割ができる。ひとつは機械的な (mechanical) もので、あらかじめの指示を通じて教えることができる。もうひとつは名前を持たず、定義したり教えたりはできない (has no name, nor can it be defined or taught)。それは生起する数知れぬ事情や状況の一切において、戦争の諸原理や指示を正しく適用することであって、いかなる規則も研究も適用も、どれほどたゆみなくなされようと、また、どれほど長期にわたる経験でさえも、この部分を教えることはできない。それは天才のみがなしうるものである。第一の部分については、数学的諸原理へと縮減可能であろう。その目的は、生起しうる異なった諸作戦すべてに対して、軍隊を構成している諸資源を準備することである。天才は無限の組み合わせを許容する、部隊の戦地・数・種類・質にしたがって、諸資源を適用しなければならない。」 (Lloyd 2005 : 14)

彼によれば、戦争科学は「数学的諸原理」へと縮減できる「機械的な」部分と、そこに還

元不可能な「名前」がなく「定義」されることもない部分とに分けられる。後者については、さらに「戦争のこの崇高で繊細な部分」(this sublime and delicate part of war)ともいわれている (Ibid : 20)。このロイドの発言に典型的に見られるように、戦術の基本を数学的に解明可能なものとする、そのような原理にはどうしても合致しないさまざまな領域が戦争にはあるのであって、こうした「余剰」を一括して、まずは大戦術、ついで戦略という用語で束ねたのである。それゆえに、この段階での戦略は明確な範囲も内容も持たず、概念として錬成されたものではなかった。

マイゼロワによる戦略の提唱は、こうした幾何学的な原理としての戦術を超出した独自の領域に関わっている。彼らはほぼ一様に、その領域をモーリス・ド・サクスにならって「崇高」(sublime)と呼んでいる。「崇高」は別稿で扱おうと考えているテーマだが、それは本来修辞学・美学の用語であって、戦争理論が十分に吸収できないでいる概念である。戦略はそうように不確かな土台のうえで提起されていた。シャンブレーの反撥には、それなりの根拠があったのである。

ビューロウの定義

マイゼロワとはまったく独立して、プロイセンではディートリヒ・フォン・ビューロウ (Dietrich Adam Heinrich von Bülow, 1755-1816) という特異な人物が、独自の戦略理論を打ち立てていた。それは「崇高」と関係することなく提起されたものである。

フリードリヒ大王が1786年に没したあと、プロイセン軍部は大王の理論的遺産を汲々と守るだけの保守的な軍人たちが中軸を占めていた (これは軍の中核を貴族で固めようとした大王にも責任がある)。革命で一新されたフランス軍と戦って、ほとんどなんの成果も挙げられなかったのは、そして、ついには1806年のイエナとアウアーシュテットでの屈辱的な大敗北にいたったのは、そのためである。クラウゼヴィッツは長文の「大破局に陥ったプロイセンについての報告」(1820年代前半に書かれたが、内容の過激さから、1888年まで公刊されることがなかった)において、高級軍人や政治家の名前を具体的に指摘しながら、彼らの無能ぶりを激烈に批判している (VkS : 301-492)¹⁴⁾。

したがって、新しい戦争理論の模索は、革命で一新されたフランス軍、とりわけその新たな指導者として急速に駆け上がってきたナポレオン・ボナパルトとの対峙という事態と、フリードリヒへの批判のうえで構築されることになる。その先鞭をつけたのは、ゲオルク・ハインリヒ・フォン・ベーレンホルスト (Georg Heinrich von Berenhorst, 1733-1814) であって、彼は3巻の『戦争術に関する諸考察』(1796, 98, 99年)という、あまりまとまりがない著述において、フリードリヒ大王の戦争体系と、その擁護者たちを正面から批判していた。だが、『諸考察』には戦略は登場せず、それゆえにここでは検討から外すことにしたい。

さきに述べておいたようなフランスでの議論と無関係に、プロイセンではハインリヒ・フォン・ビューロウが戦略と戦術についての「独創的」な分離把握をなしてあげている。ビューロウは軍籍に身を置いたこともあるが、軍人としての華々しい経歴はない。しかし、彼は『近代戦争体系の精神』（1799年）の出版によって、当時依然としてプロイセンでは支配的だったフリードリヒ大王の戦争論に異を唱え、フランスへの反革命戦争の失敗を経験的所与として前提しながら、新しい戦争理論の構築を試みていた。同書を以下では『精神』と略称することにする。

この時期のプロイセン軍部は、フリードリヒの遺産を拳々服膺するだけの、旧弊な軍人たちが大多数を占めていた。ベーレンホルストはそれに真っ向から対立する理論を提示して、それなりの賛同者を獲得していた。だが、戦争指導での一切の原理や原則を否定し、偶然という要素を最大限に見積もって、その偶然の克服を軍事的天才の生得的な能力に求めるという彼の極端な立場は、とうてい支配的なものにはなれなかった。シャルンホルストも彼を正面切って批判している（Scharnhorst 1983: 163-71）。

反原理主義・反体系主義を賞揚したベーレンホルストとは異なって、ビューロウは啓蒙思想の基本であった幾何学的原理と、それから帰結される体系を大前提にしており¹⁵⁾、さらに、同時代のウェールズ出身の軍人かつ軍事理論家だったヘンリー・ロイドの幾何学主義から多くを学んで、ロイドの「作戦線」(line of operation) という議論に、独自の「策源」(Basis) なる概念を組み合わせ、「幾何学的精神」にのっとった新奇の戦争体系を提唱したのである。

ビューロウの策源や内線作戦が軍事思想史上で持った意義については、本稿では割愛する。彼は極端なまでに自負心が強かった人間らしく、晩年には狂人として収監され、最終的に獄死しているのだが、それも省くことにしたい。最近のビューロウ評価については、アザー・ガット (Gat 1989: 79-94) やホイザー (Heuzer 2018: 193-6) に詳しい。私たちにとって重要なのは、ビューロウが戦略について、どのように斬新な見解を提示していたかということである。

彼は『精神』に寄せられた批判（主としてデンマーク軍の参謀総長ビンツェルによる）への反論として、1805年に『近代戦争体系の諸定理』を上程しているが、そのなかで「戦術と戦略という概念を明確に区別したのは、私がはじめてである」「私は戦術をはじめて戦略と同様に扱った」「私の信じるところでは、私は戦略と戦術との境界を正しく示した」「私以前にはだれも戦争を、これらふたつの主要部分に区別してこなかった」(Bülow 1805: xvi, xxviii, 1-2) というように、みずからが戦略と戦術という区別そのものの正しい創設者であることを誇っている。「私の独創性」(meine Originalität) とさえ語っているほどである (Ibid: xv)。20年以上もまえに出されていたマイゼロワの仕事への言及は皆無である。

では、彼は両者をどう規定していたのであろうか。

「戦略の諸規則を戦術に応用するまえに、私たちの見解によれば、戦略と戦術とはなんでもあり、両者のあいだのどこに分割線を引くのが、まずは規定されなければならない。

ふたつのおたがいに交戦中の軍隊の相互の視野の外部、あるいはお好みなら、大砲の勢力範囲の外部、カノン砲の射撃の外部にある戦争運動の科学は、戦略である。

敵の眼前において、つまり、敵自身を見ることができるところにある、あるいはお好みなら、大砲の勢力範囲が終わるところにある戦争運動の科学は、戦術である。」(Bülow 1799 : 84-5)

要するに、可視界の内部での軍の運動が戦術で、その範囲のそとでのそれが戦略ということになる。

クラウス・テルプは少しまえ、「軍事理論へのビューロウのもっとも重要な貢献は、戦略と戦術の定義であって、それは今日でもいまだに使用されている」と述べているが(Telp 2005 : 53)、果たしてどうであろうか。「いまだに使用されている」というのは、少々過大評価であろう。ビューロウの定義は、少し考えてみれば、彼が豪語するほどのものではない。要するに、戦場で視野の内部にある運動は戦術であり、その外部での運動は戦略に属しているという、しごく単純な2分法でしかない。視線が届く範囲を基準として、戦略と戦術とを区別しているにすぎない。

敵の城塞や陣地のなかに、とにかく砲弾を送り込めばよい攻城砲や臼砲などを別にすれば、彼の時代の野砲は、それがカノン砲であれ榴弾砲であれ、直接射撃、つまり、眼に見える敵に対して直接に照準を合わせて発射する方式しか可能でなかった。間接射撃、つまり、視野の外にいる敵を、前進観測所を設けて捕捉・報告し、射撃指揮所がその情報をもとに、発射諸元を計算して砲列に伝えて砲撃するというシステムが間接射撃であるが、それは砲の仰角を高め、発射薬を改良し、砲架をより頑丈にするなどの結果である射程距離の延伸とともに、駐退機の採用による砲の安定化、さらには、通信手段その他の技術的下部構造が整えられるまでは不可能であった。間接射撃は米国の南北戦争でようやくわずかに姿を現し、帝政ロシアやプロイセン=ドイツで教範化が進められて、その後、ポーア戦争や日露戦争での実践を経たあと、各国陸軍で採用されるようになったのである(Cf. Gudmundsson 1993 : 21)。

つまり、ビューロウの時代には、戦場において肉眼(望遠鏡で拡張されたものを含む)で把握できる範囲は、小銃や火砲の活動にとって、きわめて重大な役割を果たしていた(ボナパルトは砲兵出身であったにもかかわらず、なぜかはじまったばかりの戦場での気球の利用を廃止して、可視界を狭めてしまっている)。その意味で、ビューロウの戦略・戦術の分類は、なにがしかの魅力を発揮できたといえる。だが、可視であるかどうかは、さまざまな条件に左右される案件である。雨天や濃霧はその範囲を極度に狭めるし、当時の銃砲の発射薬であった黒色火薬は、戦場のあちこちを濃い白煙で覆っていた(無煙火薬は19世紀後半にしか登場しない)。したがって、ビューロウによる区別は、その分割線が不断に動揺するこ

とになる。

加えて、ビューロウの定義では、戦略と戦術とを隔てるのは、究極的には相対する両軍のあいだでの距離であって、両者の違いは量的な関係に還元されてしまう。そこには質的な差異は存在していない。見える範囲の内外という単一の基準が、議論を支配しているのである。戦略と戦術とは種差 (differentia specifica) を持つ概念になっていない。両者はいまだに、概念的に分離されていないのである。ビューロウがいかに「私の独創性」を誇っていても、そこには戦略を sui generis な概念として打ち立てる努力は、決定的に欠けているといわざるをえない。

ビューロウについてクラウゼヴィッツは、先に触れた前者の著書『近代戦争体系の諸定理』について、1805年に雑誌『ノイエ・ベローナ』に寄稿した長文の書評で、全面的な批判を行なっている。この『諸定理』は本文で、ビューロウの『精神』のいささか冗長な記述を、疑似的な幾何学主義によって簡潔に要約しており、彼の見解を知るには適切である。

クラウゼヴィッツと『1804年の戦略』

クラウゼヴィッツの初期の理論的著述のなかで、特に戦略についての独自の見解が生成する経緯を考察する場合、なによりもまず、『1804年の戦略』として刊行された断片集が重要になる。

ほかに、論文「フォン・ビューロウ氏の純粹・応用戦略に関する所見、あるいは、そこに含まれた見解への批判」(1805年)、『小戦論講義』(1810-11年)、グナイゼナウへの手紙(1811年6月27日)、『王太子進講録』(1812年)といった諸テキストが、初期のクラウゼヴィッツの戦略理解のために、特に注目される。

これらには『戦争論』という巨大な構築物を組み上げるための、初期の建設プランがスケッチされている。従来のクラウゼヴィッツ研究は、それらを丁寧に読み解くこと、つまり、彼の理論的進化の途取りを辿ることに、必ずしも熱心ではなかった。『戦争論』において基本的な位置を占める諸概念を、同時代の議論と対比しながら、彼の自己修練と重ねて考察することは、まだ端緒に就いたばかりだといってよい。

それらの論考に立ち入るまえに、彼が「師であり友である」と述べたシャルンホルストについて一言しておきたい。

クラウゼヴィッツにシャルンホルストが与えた影響については、これまでにさまざまに語られてきた。しかしながら、その影響の具体的な内実については、意外にはっきりとしたことが判っていない。それはシャルンホルストがプロイセンの軍政・軍令改革という困難な課題、そして1806年の大敗北のあと、ボナパルトの圧政のもとで、プロイセンの新しい軍隊を建成することに忙殺されて、自身の系統的な理論書を書き上げる時間的余裕がなかったこ

とに、多く起因している¹⁶⁾。

ここでは戦略概念だけに的を絞って考えてみる。実は、シャルンホルストには戦略への言及はわずかしかない。しかし、彼が戦略をまったく念頭に置いていなかったわけではないことが、最近判明している。彼が残した膨大な未公刊文書が近年、ヨハンネス・クーニッシュの編集で、『私的・公的著述』として全8巻で刊行された(Scharnhorst 2002-14)。私はまだ、その全体を精査しきれていないが、例えばその第3巻には、彼がハノーファーからプロイセンに軍籍を移した直後に書かれた、いくつかのテキストが収録されている。そこに戦略についてははっきりとした言及がある。この『私的・公的著述』を利用した戦争研究は、目下のところ皆無である。

彼はある報告書(執筆は1801年5月以降、1803年3月以前と推定されている)のなかで、「[戦争]術の最重要な部分、全軍をもって遂行されるStratagem」(Scharnhorst PdS 3: 322)と語っている。つまり、Stratagemはここではもはや従来のような軍の策謀や狡知ではなく、Strategieに近い意味で使われているのである。また、1801年10月から翌年にかけてなされたとされる彼の講演録には、つぎのような1節がある(これらの文書が、クラウゼヴィッツが青年将校研修所において彼の指導下で学んでいた時期に書かれていることに留意したい)。

「私はStrategieを、つまり、会戦への命令書、大規模な作戦の指導等々を見過ごしている。この重要な部門における[戦争]術は、チュレンヌとモンテクッコリ以来、1674年以来、[フランス]革命戦争にいたるまで、他の諸部門にあって私たちが把握しているような進歩を遂げてきていないのである。」(Ibid: 662)

シャルンホルストについて私がこれまで読んだものには、Strategieという用語はほとんど登場しない。上記の一文はかなり稀な例外に属している。ほかに彼が戦略に触れたものを挙げるなら、1801年末に書き留められたビューロウ批判の一文のなかでは、「著者は戦略における戦術のあらゆる規則や原理を、これら戦争術のふたつの分枝の関連や相異を考慮することなく、受け入れてしまっているように見える」(Scharnhorst PdS 8: 601)と述べられていて、ビューロウによる戦略・戦術の区分に批判的だったことがうかがえる。さらに、青年将校アカデミーの教育編成に関する訓令文章(1805年)では、第1年次には純粹戦術と小戦、第2年次には応用戦術、さらに第3年次には戦略が教えられることという指示があり、そこでは「戦略は、大規模戦争(der Krieg im Großen)への諸指示(Anordnungen)を概念把握するものであって、そこには会戦計画や、さまざまな軍団の個別作戦の諸計画などが含まれる」とされ、さらに、戦略の教育にさいしては、教示に富んだ戦争での会戦の展開をまずは取り上げたあと、「戦略の一般的教説」に進むことが奨励されている(Scharnhorst 1986: 204-5)。

彼はハノーファー時代に編集していた雑誌Militär-Bibliothek¹⁷⁾の第1巻(1782年)でマ

イゼロワの『戦争の理論』を論評しているので (Cf. Jähns 3:2084), 後者が新たに戦略を概念化しようとしていたことは熟知していたはずである。とはいえ残念なことに、目下のところ私にはこれ以上の追及材料がなく、シャルンホルストからクラウゼヴィッツへの継承関係は、さらなる追求を必要としている。

ところで、シャルンホルストの薫陶を受けながら、クラウゼヴィッツが独自の戦略概念に到達したのは、『1804年の戦略』においてである。それを少し詳しく見ておきたい。

この『1804年の戦略』は、彼が1804年に折々に書き留めた28個の断片の記述、それに1808年と1809年につけられたふたつの補遺からなっており、1937年にエーベルハルト・ケッセルによって編集・刊行された。クラウゼヴィッツが残しているもっとも初期のテキストのひとつである。それは当時、しばしば戦争論で採用されていたアフォリズム (警句集・金言集) という形式にしたがっている (モンテクッコリの『戦争術のアフォリズム』, モーリス・ド・サクスの『わが夢想』, フリードリヒ大王の「戦争の一般的原理」, ベーレンホルストの『戦争術の諸考察の著者によるアフォリズム』などが代表例である)。そこにはマキャヴェッリへの言及など、興味深い断片もあるが、ここでは戦略に話を限定する。

戦略がことばとしてはじめて登場するのは、「将帥の特性」と題された断片3においてである。そこでは低級戦術 (die niedere Taktik) と高級戦術つまり戦略 (die höhere Taktik und Strategie) が区別されているが (Clausewitz 1937: 40-1), 立ち入った内容説明はいまだこの段階では不在である。断片10¹⁸⁾でも戦略が語られているが、そこではつぎのように新たに「戦闘」(Gefecht) が加わる。

「今日の作家たちが、戦略はいまやそれだけで決定するのであり、戦術はなにも決定しないと主張しているのは馬鹿げている。戦略はまったくなにも決定しえないのであって、単に戦闘にとって好ましい時点を準備するだけで、戦闘そのものがまずは決定しうるのである。」(Ibid: 47-8)

これで戦略、戦術、戦闘という3つの要素が一応出揃ったことになる。であるなら、それら3者がどのように関連するのかが、つぎに問われざるをえない。その問いに対する答えは、断片20「戦略と戦術との定義」で与えられている。クラウゼヴィッツはそこで、後年にいたるまでしっかりと保持されている定義に到達している。それは以下のようなものである。

「戦術とは、戦闘における戦闘力の使用を通じて、いかに勝利を獲得するかについての教説であり、戦略とは、個々の戦闘の結合を通じて、いかに戦争目的を達成するかについての教説である。すなわち、優雅な表現を使うなら、戦術とは、戦闘における戦闘力の使用 (der Gebrauch der Streitkräfte im Gefechte) についての教説であり、戦略とは、戦争目的への個々の戦闘の使用 (der Gebrauch der einzelnen Gefechte zum Zweck des Krieges) についての教説である。」(Ibid: 62)

一見すると、どうということのない定義に見える。しかしながら、それは「使用」(der

Gebrauch) ということばを通じて、戦闘、戦闘力、戦術、戦略をひとつの首尾一貫した理論構造に仕立て上げるという、戦略概念の決定的な革新だったのである¹⁹⁾。マイゼロウ、ギベール、ビューロウたちがひどく曖昧に輪郭を描いた戦略は、ここにいたってようやく明確な構造化を獲得した。戦略と戦術はここで概念として確立する。

これは『戦争論』第2編第1章でより精緻に語られることになる戦略と戦術との区分の原型であり、両者を比べてみると、その基本骨格はまったく同一であることが判る。つまり、クラウゼヴィッツは24歳の若さで、すでにこの部分に関しては、完全に理論的に成熟していたのである。

つづく断片21では、「戦略にとっての戦闘は、手形取引にとってのむきだしの現金〔決済〕と同じである」(Ibid: 62-3) という、『戦争論』まで継承されて、エンゲルスに賞賛される比喩の原型が登場しているが、ここでは指摘だけに留めておく。

断片33「戦略と戦術」(1809年執筆)で、彼は再度この問題を取り上げ、さらなる肉づけを試みている。執筆年次に着目されたい。プロイセンは1806年にナポレオンに大敗し、クラウゼヴィッツは捕虜となって、フランスに抑留され、翌年末にようやく帰国を果たしている。1809年2月には、シャルンホルストの秘書官となって、敗戦後のプロイセンの軍政・軍令改革の一端を担うようになっていた。しかしながら、シャルンホルストはフランスに疎まれて、事実上の陸軍大臣の地位を追われ、軍事教育に専念することになる。彼は一般軍事学校(のちに陸軍アカデミーとなる)を立ち上げて、その戦術教官に、彼が青年将校研修所から送り出した最良の学生だったクラウゼヴィッツとティーデマン(Carl Ludwig Heinrich von Tiedemann, 1777-1812)を当てた。ふたりは親友であって、グナイゼナウあての手紙によれば、「ティーデマン=クラウゼヴィッツ戦術工房」(die Tiedeman [sic] Clausewitzsche Taktik Fabrik)を結成し(Schriften 1: 644)、学生の教育を担当した。『小戦講義』はその産物である(Cf. Stoker 2014: 84-5)。この時期に、クラウゼヴィッツは戦略と戦術との関係について、一貫した、ほぼ安定した理解に到達しており、それは『戦争論』にいたるまでほとんど揺らぐことがない。

この断片33も、「戦術とは、周知のように、戦闘についての教説である」という文章ではじまり、ついで、「戦略とは、戦争目的のための、個々の戦闘の結合(Verbindung)についての教説である」と、断片20での定義が繰り返される。実のところ、断片33は非常にまとまりのない内容で、ここで要約することは困難である。

『戦争論』への道程

先にも触れたビューロウの著書『現代戦争体系の諸定理』へのクラウゼヴィッツの長文の書評は、雑誌『ノイエ・ベローナ』(Neue Bellona)に1805年に発表された。彼のはじめて

の公刊文書であり、文筆家クラウゼヴィッツがここに誕生したのである。ビューロウは同書で、『現代戦争体系の精神』に寄せられたデンマーク軍参謀総長のヨーハン・ルートヴィヒ・ヤーコプ・ビンツァー將軍によるビューロウ批判への反批判を「序文」で展開し、本文では『精神』の内容を「数学的教育方法にしたがった戦争科学」として「定義」「分析」「補遺」「定理」「証明」などに整序して再構成している。疑似的な「幾何学的精神」が極まった著作で、理論的には『現代戦争体系の精神』から一歩も出ていないが、ビューロウの所論が簡潔にまとめられているので、参照するには便利である。

クラウゼヴィッツはこの書評の最後近くで、かつては自分もビューロウの議論に惹かれたことがあったと認めている。もっとも彼が書評で下した最終判断は、著者が「軍事的な子供友達」(der militärische Kinderfreund) だという、手厳しいものであった (VKS: 87)。すでに『1804年の戦略』においても、各所でビューロウ批判がなされているが、この書評論文はビューロウに対する彼の総決算であり、その内容のいくつかは、『戦争論』にも組み込まれている。

書評でのビューロウ批判は多岐に涉っているが、『精神』におけるすでに引用した彼の戦略と戦術の定義に議論を絞ろう。クラウゼヴィッツはいう。

「今日まで戦争と戦術という概念が、きわめて不確定なままに使用されてきていること、さらに、とりわけ戦略については、いかなる明確な表象も持っていないことは、確かに真実である。また、著者がみずからの主張を明晰かつ適確に述べていることも、否定できない。」(Ibid: 67)

とはいえ、クラウゼヴィッツの批判は、ビューロウが両者をともに「数学的計算」(eine mathematische Calcul) へと還元可能だと考えたことに向けられる。特に戦略に関して、そうである。

「戦略は単に、数学的計算に左右される量で働くわけではない。反対なのだ！ 人間の洞察が精神的本性のなかに、戦士に奉仕しうるなんらかの補助材料を見出すところでは、それがどこであろうとも、それは術の王国 (das Reich der Kunst) なのである。作詩術 (die Dichtkunst) の諸規則を、韻律その他の感性的対象へと切り縮めるべきだと、だれが明言できようか。彫刻芸術の研究が、人間の身体の知識へと限定されるなどと、だれが妄想しようか。そして最後に、だれが戦略は機械的術 (eine mechanische Kunst), さらに手工業 (eine Handwerk) へと貶めることなど思いつくであろうか。」(Ibid: 81)

戦略は合理的計算の対象ではない。それは「術の王国」に所属しており、それゆえに、定理や、その根底にある原理によって解明はできない。というのも、そこでは量的諸関係だけでなく、「精神的量を計算する」(auf moralische Größen zu calculiren) ことも必要となるからである。クラウゼヴィッツはここで、幾何学的戦争理論にきっぱりと別れを告げる。幾何学主義は物理的要素に対象を限定することで原理や定理を構築したが、一端精神的諸要素

クラウゼヴィッツと戦略概念の形成

が問題になると、そこで思考停止してしまい、崇高や天才を外挿してその領域をカバーすることになる。このことは『戦争論』で詳しく取り上げられているが、すでにビューロウ批判で提示されていた。これは『1804年の戦略』では主題化されていなかった。

精神的諸要素を考察することは、戦略にさらに、「偶然」(Zufall)や「確からしさ」(Wahrscheinlichkeit)といった概念を持ち込んでいる。それゆえに、ビューロウ批判はクラウゼヴィッツにとって、戦略理解にさらに豊かな内容をもたらしたとあってよいであろう。

とはいえ、1804年に彼が概念把握した戦略と戦術との質的な差異は、ビューロウ批判のあと、一般軍事学校での教育内容を簡明に伝えている、グナイゼナウへの手紙(Schriften 1: 645-7)、『小戦講義』、『王太子進講録』といった、1810年前後のテキストでもしばしば語られているが、基本においてまったく変化がない。それは『戦争論』までつづいている。

おわりに

ここまでで判ったことを纏めておきたい。

戦略という用語は、古代ギリシアに端を発しており、それは taxis の上位概念として、政治と軍事とを媒介する位置を占めていた。しかし、それはなぜかローマ時代には用いられなくなった。ビザンツ帝国でも、戦略は使われていないが、レオン6世の場合には、将帥の術として無名なままで浮上していた。

近代ヨーロッパでは、とりわけフランスにおいて、当時出現していた新しい戦争体系を記述するために、まず戦術が用語として復活し、まずは umbrella concept として、戦争理論のほとんど全体を包括したが、しだいに内部で分岐して、大戦術と初等戦術という区別が立てられるにいたった。

初等戦術は啓蒙主義の影響下で、幾何学的な原理にしたがうとされたために、そこには収容できない部分が生じていた。とりあえずは大戦術という区分を立てて、それを扱ったが、しかし、その内容は初等戦術との原理とは別個のものだという理解が進み、マイゼロワは新しく、古代ギリシアから戦略ということばを引き出して、戦術とは異なる領域をそう呼ぶことを提唱した。

だが、戦略の理論的定義に関しては、少なからぬ混乱があり、その内容は流動的であった。ビューロウや、ここでは扱わなかったがアントワヌ・ジョミニ、カール大公たちがこの問題に取り組み、定式化に努力していたが、いずれも戦術との概念的差異化に成功していない。というのも、彼らの議論においては、戦略の位置づけがつねに、幾何学的原理では把握できない多様な諸要素のすべてを、相互の連関を考慮することさえなしに雑然と積み込んだものだったからである。戦略は基礎となる原理からはみ出した、なにか余計なものの集合体でしかなかった。

クラウゼヴィッツは、おそらくはカント哲学での理性・悟性・感性という区別にヒントをえて、2重の「使用」によって戦略・戦術・戦闘を概念体系として首尾一貫した理論へと仕上げた。それは青年期の『1804年の戦略』から、成熟期の『戦争論』にいたるまで基本的には変わることなく保持されている。

以上が本稿の主旨である。論及すべき問題は数多く残されている。とりわけ、18世紀の軍事理論が、修辞学や美学から借用した「崇高」(sublime)は、戦略の政治との位置関係を考える場合に無視できない。同じく18世紀に美的創造との関わりで広く論じられていた「天才」(genius)の問題は、幾何学的戦争論の頂門の一針であって、崇高とも深く関係している。さらにそれは、幾何学主義が唱える戦争原理なるもの、今日でさえ「戦いの原則」として、米国や日本で生きながらえている原理論のアキレス腱を明らかにしてくれる。これらはいずれ、別稿として予定しておきたい。

戦略という用語にはこのように、概念としてのかなり長い歴史が積み重ねられている。そうした歴史的な「厚み」をすべて捨象したうえでしか、マーケティング戦略だの経営戦略だのという表現は成り立たない。ことばに重層的に畳み込まれている意味を丁寧に解釈することが、現在戦略としてあまりにも拡散した表現に接近する予備的作業として求められている。

注

- 1) 句読点は私が随時加えており、いくつかの漢字をコンピューターで使用可能なものに改めるとともに、JIS規格の第2水準漢字にもないものは、●として偏や旁を個別に記述する
 - 2) この省略は暴力的といつてよいが、議論の都合上で可能である。例えば、『戦争論』第1編第1章では、はじめのうちは戦争が独立したものとして扱われ、ついで「政治的目的」が(再)導入され(第11節)、政治的道具としての戦争が再定義されている(第23節)。このようなプロセスにあっては、一時的にむきだしの戦争を語ることは許容される。
 - 3) クラウゼヴィッツはしばしば、単一の定冠詞のもとにふたつの名詞を収納している。『戦争論』の邦訳の多くは、このふたつの名詞を分離して訳しており、時にはかなり重大な誤りに陥っている。特に「政治家にして将帥である人間」(der Staatsman und Feldherr) (VK: 212/I-1-27) という表現がそれである。それは政治家と将帥とを一身に兼備した人間のことである。おそらく、クラウゼヴィッツはフリードリヒ大王やナポレオンを念頭に浮かべていたのであろう。したがって、「政治家や最高司令官」(清水多吉訳)とか「政治家や将軍」(日本クラウゼヴィッツ学会訳)と両者を分離してしまうのはまったくの誤りである。「卓抜な政治的洞察力を具えた将帥」(篠田英雄訳)も、将帥を主語にするかぎり誤解を与える翻訳になっている。それは政治家と軍人とが「ひとつの人格に統合されている」(in einer Person vereinigt) (VK: 995/VIII-6B.) ことなのである。その場合でも彼の主張にしたがうなら、そこで主導権を取るのは彼の政治家としての側面であり、決して将帥という資格が優先されることはない。
- なお、ここでの整序と指導という訳語に関してだが、篠田訳では按排と指導、清水訳では「一定の秩序のもとに配列し遂行すること」、学会訳では配列と遂行である。
- 4) この stratēgia からさらに、将帥の術の一部(軍略・謀略)を構成する stratēgēma が派生し

ている。Strategia のほうは古代ローマ以降、18 世紀後半にいたるまで、基本的にはヨーロッパでは忘却されたが、stratēgēma のほうは「戦争での狡知」として長く 19 世紀まで存続する。それは、フリードリヒ大王の表現を借りるなら、「戦争においては、ライオンの皮とキツネの皮とを、交互に纏うことになる。力 (la force) が失敗するところでは、狡知 (la ruse) が成功する。それゆえに、両者をともに利用することが、絶対的に必要である。狡知は数限りなく存在する。私はそれらのすべてを語るつもりはない。だが、その目的は同じであって、敵をして我が方が望む運動へと向かわさせることである」(Frédéric le Grand 1856 : 43) ことにほかならない。クラウゼヴィッツは『戦争論』第 3 編第 10 章「狡知」で、この問題を扱っている。

- 5) レイモン・アロンは『戦争論』では、政治と戦争との関係が、戦略と戦術との関係と同一だと述べているが (Aron 1976 : 167-8)、それには同意できない。
- 6) クロード・レヴィ=ストロースは現存する諸手段を適切に組み合わせ、課題を兎にも角にも解決してしまう仕方を「器用仕事」(bricolage) と呼んだが (『野生の思考』)、そのアイデアは『ブリュメール 18 日』からえていたのであろう。彼の『悲しき熱帯』での同書への言及を参照。
- 7) ピュイセギュール (Puységur, Jacques-Antoine de Chastenet, marquis de, 1655-1743) は、没後に刊行された『原理と規則による戦争術』のなかで、以下のようにいっている。

「私はローマ人やギリシア人に立ち戻って、ホメロスまで遡った。私はこの点で、ホメロスのなかに、なにか素晴らしいものを見いだすことには、大いなる希望を持っていなかったにしても、なにごととも無視しないために、私は『イーリアス』の翻訳を読むことから始めて、ついで、ヘロドトスの著書 [『歴史』] を読み、クセノポンの 1 万人の退却 [『アナバシス』]、彼の『キュロスの教育』、『ギリシア史』、それに『ソクラテスの思い出』を読んだ。さらに、ペロポネソス戦争についてのトゥキディデス、この戦争についてのクセノポン、アリアノスによるアレクサンドロスの諸戦争、ポリュビオス、プルタルコス [『対比列伝』] によるポリボイメン伝、カエサルの註釈、そしてウエゲティウスがつづく。ウエゲティウスのあとには、なにほどこかの原理をもって戦争を扱った作家はもはや見出せないのだが、戦争がローマ人から現代までどう実行されてきたのかを知るために、私はフランス民兵についてのダニエル師の論考に依拠した。最後に、私はモンテクッコリ氏の覚書、それにチュレンヌ氏のみずから書いた諸戦役 [の記述] を読んだ。これらの書物 (ces livres) は私に、戦争を教えるために、また、戦争を最良の術をもって実践した諸国民がどうであったのかを、はるか昔の時代から現代にいたるまでなにがなされてきたのかを判断するには充分だと思われる。」(Puységur 1749 : 4-5)

要するに、古典への絶えざる参照なしには、現前している戦争の解明はありえなかったことになる。このピュイセギュールの著書は、まさしくホメロスからはじまって、古代文献の延々たる引用と註釈を特徴としている。第 2 巻になってようやく、チュレンヌの諸戦役に辿りつくのである。

- 8) マックス・イエーンズの『戦争科学の歴史』は、全 3 冊、合計で 1800 ページ近い大著であって、「主としてドイツでの」(vornehmlich in Deutschland) という副題がつけられているにしても、フランス語、イタリア語、ラテン語、英語、スペイン語で出されていた文献についても、かなり遺漏なく眼を配っている。ガットはイエーンズが「軍事思想の全般的な知的文脈 (それどころかすべての社会的・政治的な文脈) に無自覚」だったことを批判しているが (Gat 1989 : 26)、これは少々無いものねだりであって、同書は一応 1800 年までにヨーロッパで出版

された膨大な軍事文献のタイトルを網羅して、それらをいくつかの小分類に纏めたうえで、おのおの文献に簡単な註釈をつけることを目的にしているのである。いわば軍事思想の歴史的な文献解題の書であって、イエンスにそれ以上を求めるべきでない。いずれにしても、とりわけ17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ古典兵学の形成過程を、イエンスはフリードリヒ以前と以降とに分けて驚くほどの博識で記述しており、戦争に関するこの時代の諸言説を知るためには必読の著書である（第3冊の「後書き」にはクラウゼヴィッツとモルトケへの重要な言及もある）。

- 9) この論争に関しては、まずもってジャン・コラン (Colin 1907) を参照。また、クインビーによる詳細な解説も (Quimby 1968)。
- 10) 例えば、サルデーニャ軍に仕えたシルバ・イ・フィゲロアの『戦術と戦略についての思索』(1778年)。同書での定義は「戦略とは本来的に、将帥の科学 (science du Général) である。それが教えるのは、作戦計画を形成し、戦術のさまざまな分野が将帥に提供する一切の諸手段を利用・統合することである」(Silva y Figeroa 1778:1) というものであった。また、のちにも触れるビザンチン皇帝レオン6世の著書は、ヨーハン・ヴィルヘルム・フォン・プールシャイトによってドイツ語に訳されたが、その題名は『哲人皇帝レオンの戦略と戦術』であった。訳者のプールシャイトはまた、1782年に『戦略にすべて奉仕する戦術・兵站学教程』を出版している (Bourscheid 1782)。
- 11) プルセの名著は『山岳戦の諸原理』(Boucet 1888) である。同書は1775年に執筆されたが、国家機密に関わる部分があるとして出版を禁じられ、長く草稿のコピー、あるいは、私的印刷だけで密かに流通した。題名からすると、ひどく限定された主題を扱っているように見えるが、ギベールの『戦術の一般的試論』と並んで、革命直前のフランス軍隊に大きな影響を与えている (Quimby 1968:175-84)。ジャン・コランは若きナポレオン・ボナパルトに与えたプルセの影響について、こう述べている。「『山岳戦の諸原理』を深く知れば知るほど、より一層そこにボナパルトの手口、とりわけ彼が1794年と1796年に使用した手口との深甚な類似を見いだす。……思うに、プルセとボナパルトは、前者はその長期にわたる経験と才能によって、後者はその天才によって、同じ結論に到達したのであろう」(Colin 1900:95)。
- 12) サクスは「戦争術の一部は方法的 (méthodique) であって、それは規律と戦闘法だといってよかろう。もうひとつは崇高的 (sublime) であり、後者についてはそれを処理するためには、凡庸な人間を選ぶべきではない」と述べている (Saxe 1977:138)。ここで「崇高的」といわれているのは、ニコラ・ボワローが1674年に仏訳した伝ロンギノスの『崇高について』(AD1世紀に成立) によって、近代ヨーロッパにもたらされた用語であり、サクスがそれを戦争術の分類に採用したのである。少なくとも19世紀前半まで、崇高は修辞学や美学の領域だけでなく、軍事理論においても大きな役割を演じている。それはサクスからはじまる。マイゼロワの「戦争の科学 (la science de la guerre) は、ふたつの部分からなる。ひとつは機械的な部分 (le mécanisme) であって、そこには部隊の構成、軍令 (ordonnance) によって (par principes) 提示し、諸規則を与えることが可能である。他の部分は崇高 (sublime) であって、将帥の頭のなかにある。それは時間、場所、状況に依存し、無限に変化して、決して2度とは完全に同じものが見出せない」(Maizeroy 1766 2:401) という文章も参照。このことについては、準備中の別稿で扱う予定である。
- 13) 英語圏ではなぜか、用語としての戦略の採用は、大きく遅れている。1802年に刊行されたチ

クラウゼヴィッツと戦略概念の形成

ヤールズ・ジェイムズの『軍事用語辞典』(James 1802)には、stratagemは「戦争において、ある軍隊、あるいは、なんらかの人間集団を欺騙し奇襲するなんらかの企画ないし計画」として5ページにおよぶ詳しい説明がなされているが(この辞書にページ数は不在)。しかし、strategyはそこには登場していない。

- 14) 『戦争論』では、つぎのようにも言われている。「1806年のプロイセン軍にあっては、不決断がもたらした混乱は、時代遅れで狭量で役立たずの見解および方策と、目下の重大な意義についていくらか明晰な洞察と、また、正しい感得とが混淆した結果であった。」(VK: 861/VI-30)
- 15) エルンスト・カッシーラーは名著『啓蒙主義の哲学』のなかで、ブレーズ・パスカルが「幾何学的精神」だけでなく、同時にそこに還元できない「繊細な精神」をも考慮していたことを取り上げながら、しかし、パスカルのこうした2重の視点が、啓蒙主義の時代には無視され、「幾何学的精神」が跋扈するようになったことを指摘している(カッシーラー 2003 上巻: 42-3)。アザー・ガットは幾何学主義に関して、それが厳密に当てはまるのは、オーストリアのカール大公や、同じくオーストリアの戦争理論家だったアウグスト・ヴァーグナーであって、ビューロウを含めて18世紀には「幾何学的戦争学派」は存在しなかったとのべている(Gat 1989: 93)。しかし、ピュイセギュール、マイゼロワ、ビューロウたちが、幾何学モデルを基本として戦争体系を構想していたことは、疑いえない事実である。
- 16) クラウゼヴィッツは追悼文「シャルンホルストの生涯と性格とについて」(1817年に執筆されたが、クラウゼヴィッツの没後、1832年に公刊)のなかで、シャルンホルストの体系的な戦争理論が断片として存在しており、その主要部分は遺稿のなかにあるが、彼の思想があまりにも独創的なために、それらを纏め上げるのは困難だと表白している(VkS: 232-3)。
- 17) この雑誌については、ホワイトの記述を参照(White 1989: 9-12)。
- 18) 編者のケッセルが触れているように、この断片10は本来別々に分けるべきふたつの断片からなっている。
- 19) この「使用」(Gebrauch)という用語は、日常的なそれではなく、私はそこに、キーゼヴェッター経由でクラウゼヴィッツに伝わったカント哲学の影響を感知せざるをえない。本稿で詳述はできないが、戦略—戦術—戦闘という重層化された理論構造は、カントの理性—悟性—感性というそれとanalogousである。もちろん、クラウゼヴィッツにはカント的な意味での理性(Vernunft)は存在していないし、悟性(Verstand)理解についても、カントにまったくしたがっているわけではない。しかし、そこに使用を差し込むなら、両者の理論的な相似性が浮き上がってくると思われる。これは別稿で扱う予定でいる。

参考文献

Alger, John I.

1982 *The Quest for Victory: The History of the Principles of War*, Westport: Greenwood.

Aron, Raymond

1978 *Penser la guerre, Clausewitz*, tome 1, Paris: Gallimard.

Berenhorst, Georg Heinrich von

1978 [1827] *Betrachtungen über die Kriegskunst*, 3. Aufl., Osnabrück: Biblio.

Bourcet, Pierre de

1888 *Principes de la guerre de montagnes*, Paris: Imprimerie Nationale.

Bourscheid, Johann Wilhelm von

1782 *Kurs der Taktik und Logistik in allen dem Dienste der Strategie*, Wien: Trattner.

Bülow, Dietrich Adam Heinrich von

1799 *Geist des neuern Kriegssystems*, Hamburg: Benjamin Gottlieb Hofmann.

1805 *Lehrsätze des neuern Kriegssystems*, Berlin: Heinrich Frölich.

Chambray, Georges de

1829 *Philosophie de la guerre, suivie De melanges*, 2e ed., Paris: Pilet Ainé.

Clausewitz, Carl von

1937 *Strategie aus dem Jahre 1804 mit Zusätzen von 1808 und 1809*, hrsg. von Eberhard Kessel, Hamburg: Hanseatische Verlagsanstalt. (これは Vks : 3-61. にも収録されているが、そこではケッセルの有益な註釈はすべて削除されている)

1941 *Geist und Tat. Das Vermächtnis des Soldaten und Denkers*, hrsg. von Walter Malmsten Schering, Stuttgart: Alfred Kröner.

1966-1990 *Schriften-Aufsätze-Studien-Briefe*, 2 Bde., hrsg. von Werner Hahlweg, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht. (Schriftenとして引用。本書は2巻3分冊からなるが、第2巻の2分冊は、通しのページ数なので、引用にさいして分冊はいちいち表記しない)

1979 *Verstreute kleine Schriften*, hrsg. von Werner Hahlweg, Osnabrück, Biblio. (本文中では Vks として引用)

1980 *Vom Kriege*, hrsg. von Werner Hahlweg, Bonn: Ferdinand Dümmler. (本文中では VK として引用し、ページ数とともに、篇と章、それに節があれば、それを並記する)

1993 *Kriegstheorie und Kriegsgeschichte. Carl von Clausewitz. Helmuth von Moltke*, hrsg. von Reinhard Stumpf, Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag. (本書は『戦争論』の抄録と、モルトケのいくつかの論述を集めたものだが、概念史にのっとった詳細な註釈に重要な価値がある。同書からの引用はすべて、シュトゥンプフの註釈からなされる)

Colin, Jean

1900 *L'éducation militaire de Napoléon*, Paris: R. Chapelot.

1907 *L'Infanterie au XVIIIe siècle. La tactique*, Paris: Berger-Levrault.

David, Alexandre

2010 "L'interprète des plus grandes maîtres". Paul-Gédéon Joly de Maizeroy l'inventeur de la stratégie," *Stratégique*, no. 99, pp. 63-85.

Decker, Karl von

Die Taktik der drei Waffen: Infanterie, Kavallerie und Artillerie, einzeln und verbunden, 2 Teilen, 2.Aufl., Berlin, Posen und Bromberg: Ernst Siegfried Mittler.

Detienne, Marcel et Jean-Pierre Vernant

1974 *Les ruses de l'intelligence. La métis des Grecs*, Paris: Flammarion.

Donker, Paul

2014 "Clausewitz and the Netherlands," in: *Clausewitz Goes Global. Carl von Clausewitz in the 21st Century*, ed. by Reiner Pommerin, Berlin: Carola Hartmann Miles Verlag, pp. 210-38.

クラウゼヴィッツと戦略概念の形成

Frédéric le Grand

1856 “Les principes généraux de la guerre” in: *Oeuvres*, tome 28, Berlin: Rodolphe Decker, pp. 3-95.

Freedman, Lawrence

2013 *Strategy: A History*, Oxford: Oxford Univ. Press.

Gudmundsson, Bruce I.

1993 *On Artillery*, Westport: Praeger.

Guibert, Jacque Antoine Hipolyte de

1803 *Oeuvres militaires*, 5 tomes, Paris: Magimel. (第1巻と2巻に『戦術の一般理論』, 第3巻と4巻に『弁護』を収録)

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich

1970 *Enzyklopädie, I, Werke*, Bd.8, Suhrkamp: Frankfurt am Main. (『小論理学』上・下巻, 松村一人訳, 岩波文庫)

Heuser, Beatrice

2010 *The Evolution of Strategy: Thinking War from Antiquity to the Present*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.

2016 “Theory and Practice, Art and Science in Warfare: An Etymological Note,” in: *War, Strategy and History: Essays in Honour of Professor Robert O’Neill*, ed. by Daniel Marston and Tamara Leahy, Melbourne: Australian National Univ. Press, pp. 179-96.

2018 *Strategy Before Clausewitz: Linking Warfare and Statecraft, 1400-1830*, London: Routledge.

Jähns, Max

1889-91 *Geschichte der Kriegswissenschaft vornehmlich in Deutschland*, 3 Abteilungen, München/Leipzig: R. Oldenbourg. (Jahns 1 ; 2 ; 3 として引用)

James, Charles

1802 *New and Enlarged Military Dictionary, or, Alphabetical Explanation of Technical Terms*, London: T. Egerton.

Jomini, Antoine Henri

1977 *Précis de l’art de la guerre*, Paris: Champ Libre. (『ジョミニの戦略理論』今村伸哉訳, 芙蓉書房出版) この翻訳は日本ではじめてジョミニの『戦争術概要』を原文から訳したものであるが、なぜか同書冒頭近くに置かれた重要な文書「現今の戦争理論とその有効性についての註記」が省かれてしまっている。それはかなり大きな欠陥である。また、今村がつけている長大な註釈には誤りが多いので、利用にさいしては注意が必要である。

Karl, Erzherzog von Oesterreich

1882 *Ausgewählte militärische Schriften*, Berlin: Richard Wilhelmi.

Kessell, Eberhard

1987 *Militärsgeschichte und Kriegstheorie in neuerer Zeit. Ausgewählte Schriften*, hrsg. von Johannes Kunisch, Berlin: Duncker und Humblot.

Krug, Wilhelm Traugott

1815 *System der Kriegswissenschaften und ihre Literatur*, Leipzig: Wilhelm Rein.

Leon

1771 *Institutions militaires de l'Empereur Leon le philosophe*, trad. par Joly de Maizeroy, 2 tomes, Paris: Claude-Antoine Jombert.

Lloyd, Henry Humphrey Evans

2005 *War, Society and Enlightenment. The Works of General Lloyd*, ed. by Patrick J. Speelman, Leiden: Brill.

Lossau, Johann Friedrich Constantin von

1815 *Der Krieg. Für wahre Krieger*, Leipzig: Wilhelm Engelmann.

Maizeroy, Paul-Gédéon Joly de

1766 *Cours de tactique, théorique, pratique et historique*, 2 tomes, Nancy: J.B.Hiacinthe Leclerc.

1777 *Théorie de la guerre*, Nancy: Veuve Leclerc.

Marx, Karl

2007 *Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*, Suhrkamp: Frankfurt am Main. (『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』植村邦彦訳, 平凡社ライブラリー) なお, 植村訳は初版 (1852 年) を, ズーア坎プ版は第 2 版 (1869 年) を底本にしているが, 本稿での引用箇所に関しては, 異同はない。

Montecuccoli, Raimondo

1973 *Aforismi dell'arte bellica*, a cura di Emilio Faccioli, Milano: Fratelli Fabbri.

Müller, Gotthard Christoph

1796 *Militärische Encyclopädie*, 2 Bde, Göttingen: Johann Christian Dieterich.

Oki Takeshi (大木毅)

2014 "Clausewitz in the 21st Century Japan," in: *Clausewitz Goes Global. Carl von Clausewitz in the 21st Century*, ed. by Reiner Pommerin, Berlin: Carola Hartmann Miles Verlag, pp. 203-9.

Puységur, Jacques-François de Chastenet, Marquis de

1748 *Art de la guerre par principes et règles*, tome 1, Paris: Charles-Antoine Jombert.

Quimby, Robert S.

1968 *The Background of Napoleonic Warfare. The Theory of Military Tactics in Eighteenth-Century France*, New York: AMS Press.

Saxe, Maurice de

1977 *Mes rêveries*, Paris: Editions d'Aujourd'hui.

Scharnhorst, Gerhard von

1983 *Ausgewählte Schriften*, hrsg. von Ursula von Gersdorf, Osnabrück: Biblio Verlag.

1986 *Ausgewählte militärische Schriften*, hrsg. von Hansjürgen Usczeck und Christa Gudzent, Berlin (-Ost) : Militärverlag.

2002-14 *Private und dienstliche Schriften*, 8 Bde., hrsg. von Johannes Kunisch, Köln: Böhlau. 引用にさいしては, Scharnhorst, PdS と略して, 巻数とページ数を挙げる。

Silva y Figueroa, Garcia de

1778 *Pensées sur la tactique et la stratégie ou vrais principes de la science militaire*, Turin:

クラウゼヴィッツと戦略概念の形成

- Imprimerie Royale.
- Stoler, Donald
2014 *Clausewitz. His Life and Work*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Strachan, Hew
2005 “The Lost Meaning of Strategy,” *Survival*, 47, pp. 33-54.
- Telp, Claus
2005 *The Evolution of Operational Art 1740-1813: From Frederick the Great to Napoleon*, Abingdon: Frank Cass.
- Van Crefeld, Martin
2005 *The Art of War: War and Military Thought*, London: Cassell.
- Vidal-Naquet, Pierre
1981 *Le chasseur noir. Formes de pensée et formes de société dans le monde grec*, Paris: François Maspero.
- White, Charles Edward
1989 *The Enlightened Soldier: Scharnhorst and the Militärische Gesellschaft in Berlin, 1801-1805*, Westport: Praeger.
- オールドリッジ, A.O.
1987 「新旧論争」 E.R. ドッズほか『進歩とユートピア』桜井万里子ほか訳, 平凡社, 所収
- カッシーラー, エルンスト
2003 『啓蒙主義の哲学』中野好之訳, 上・下巻, ちくま学芸文庫
- 菊池良生
2002 『傭兵の二千年史』講談社現代新書
- 小山弘健
1984 『増補新版 軍事思想の研究』新泉社
- 佐久間象山
1935 『象山全集』第5巻, 信濃毎日新聞
- 佐藤堅司
1942 『日本武学史』大東書館
- 前原透
1994 『日本陸軍用兵思想史』天狼書店